

世界革命

- 工場党建設のために
- 党機関紙の任務はなにか
- レーニン組織論の現代的意義

激化する世界危機と工場占拠闘争

—ニクソン訪中・ドル緊急措置は何を意味するか—

No. 3

1971, 9

前衛編集委員会

世界革命 第三号

前衛編集委員会

目次

党機関紙の任務はなにか..... 3

——機関紙活動の革命的再編のために——

I 総括

II 方針

工場党建設のために..... 31

I 地下労働者行動委員会運動の構築のための党の任務

II 党・労働者行動委員会・労働組合

III 党工作者と党建設

レーニン組織論の現代的意義..... 55

一、はじめに

二、確固たる党指導部の形成

三、確固たる指導部による「上からの」党建設

四、綱領と党の統一性と継承性

五、綱領に基いた過渡期の党の政策

六、党組織論についての若干の考察

激化する世界危機と工場占拠闘争..... 67

——ニクソン訪中・ドル緊急措置は何を意味するか——

I ニクソン訪中

II 金・ドル交換全面停止、一〇%輸入課徴金

III 激化する世界危機の現局面

IV 工場占拠闘争の条件の成熟

党機関誌の任務はなにか

機関紙活動の革命的再編のために

山川 煤 煙

同志諸君！

七〇年安保階級闘争の二重の敗北を確認し、職場・学園において遊撃戦を基本形態とする権力闘争の断固たる推進と新左翼秩序派に対する「武器の批判」を開始したわれわれは、その闘いを党内革命へと発展させ、ようやくこうした権力闘争の質を担いうる党主体の端緒的成立を口にすることができるようになった。

いうまでもなく、このときすでに学園占拠・都市反乱となつて爆発した革命的高揚の最初の大波は過ぎ去つていた。そしてわれわれが創出した共産主義武装行動委員会の革命的衝撃力をもつても、自治会主義に舞いもどつた新左翼秩序派を学園でただちに突き崩し、労働者総反乱への意識性・組織性をもつた全共闘の革命的再生を待ちとることは困難であつた。

しかし、他方、労働者大衆はようやく本格的に権力闘争の戦列に登場しようとしている。なぜなら、第一に、安保階級闘争の敗北は、フランスの「五月」のごとく工場労働者を本格的反乱にまきこんだうえでの敗北ではなく、いうならば、工場労働者の頭上をかすめて通りすぎたものであつたからである。また、第二に、あらたな不況下にいつそうきびしい合理化攻勢が官民を問わずおそいかかり、実質的にそれを賃金と取引する組合主義的春

闘もゆきづまりと無力化を一段と暴露してきており、そのなかで生産性向上運動から資本のヘゲモニーではじまつた再編の動きは、大型合併にともなう企業連から単産レベル、全国レベルの労働戦線統一へ、さらに産別労使会議から全国レベルの労使懇談会へと地すべりのにすすみ、所得政策へのおぜん立てがとどのいつつある。そして下部の戦闘的労働者大衆は、無力化する組合からますます精神的に離れつつあるからだ。

こうして六七年初以来端緒的にはじまつた日本危機の階級情勢はいちじるしく不均等に発展している。

われわれは、この状況に直面して、学園の権力闘争と対中核党派派闘争によつてきたえた共産主義武装行動委員会とその指導部の質を堅持し、それを党内部の前衛的パネとしながら、そしてまた職場の遊撃的反乱闘争とおしてA地区に根づきはじめた職場の地下行動委員会とそれを指導する地区党をもう一つの前衛的パネとしながら、全国的工場占拠闘争とそれを担う全国的工場党の創出へ向けて全力をあげてとりくみをはじめようとしている。まず、工場党の基本骨格とそれに指導された職場大衆行動委連合の独占大工場包囲への布陣を実現することこそが、全国的工場占拠闘争の爆発のための、すなわち第二のいつそう決定的な革命的高揚をつくり出すため

の課題である。数カ所の小さな野火もやがて広野を焼きつくことができる。

だが、わが党の機関紙体制とその活動は現在重大な限界を暴露して、党活動の枠柵となつてゐる。われわれは、その根本からの点検と革命的再編なしにこのような課題遂行と党の飛躍はありえないことを卒直に認めねばならない。そして、機関紙体制とその活動の根本からの点検は不可避免的に党体制と党活動全体の、なかでも党の中央指導体制とその活動の根本からの点検とならざるをえない。なぜなら、機関紙体制とその活動は一般的にいっていわば党の頭脳細胞および神経細胞とその働きにほかならないからであり、そしてまたとくにわが党においては編集委こそがこれまで実質的に党の最高指導部であつたからである。

以下は、このような視点からの結党以来の機関紙体制とその活動の自己批判的総括とその革命的再編のための方針の提案である。したがつて、これは党体制と党活動全体の、とくに党中央指導体制とその活動の革命的再編を、そのようなものとして現在提起されている第二次党内革命に応えるものである。

治・経・情・勢・分・析・か・ら・要・求・さ・れ・る・「・あ・る・べ・き・党・の・あ・る・べ・き・方・針・」を、その水準に達しない新左翼諸派を批判しつつ、宣伝煽動したのである。

われわれのこの編集方針は、(イ)情勢が革命的高揚の局面にあり、既成左翼の議会主義的組合主義な戦後型階級闘争を急進的に乗り越えることからはじまった大衆闘争は、占拠・反乱闘争として自然発生的に大ききなりとなりなつてあらわれ、無数の革命的共産主義的活動家が生まれつつあつた、(ロ)ただ、その公認の指導部の地位についた新左翼諸派はその出生からして反戦・反安保・反帝の実力反政府闘争の左翼であり、そのようなものとして多かれ少なかれ先進的な労働者学生大衆の自然発生的意識の代弁者にすぎず、彼らの言葉はともかく行動は、そうした反安保の反政府実力闘争を工場占拠・二重権力・武装蜂起の革命的権力闘争のための過渡的戦術として利用することを十分に知つていなかった、(ハ)しかし、われわれに革命党の実質はなく、革命的理論そのものが未確立であり、したがつてわれわれ自身わずかに編集委員会プラス・アルファないし中央委員会を党的中核とした共産主義的活動家およびその集団の小さなゆるい結合として存在していたにすぎないという主体的組織状況にあつた——という三つの条件にもとづいて立てられていた。

I 総括

A 党主体の自己総括・相互点検を欠いた没主体的紙面と外在的な編集委員会

一、結党から安保決戦敗北まで

一、われわれの結党当初の『前衛』編集方針は、定式化してゐるなら、「宣伝の党から党の実体をつくり出す」というものであつた。すなわち、機関紙誌は、革命的理論を生み出し、宣伝しながら、その理論の普遍性によつて革命的活力に満ち溢れた共産主義的活動家およびその集団を党に結集しようとした。そしてその観点から、機関紙誌は、極端にいうなら、あるていど党とその運動の現状を離れても、紙面を高い質で一貫させ、客観的な政

こうした三つの条件は、レーニンが「何をなすべきか」を書いた当時の条件——(イ)社会民主主義派の理論と綱領が、みずからをナロードニキ派から区別するものとしてのかぎりで成立し、一八九四〜九八年の大衆闘争の高揚期にいったん党として登場した、(ロ)だが、それはまだ内部に改良主義的潮流を含んだ過渡的なものにすぎず、したがつてつづいて訪れた「混乱、崩壊、動搖の時期」に党指導部は解体し、党は政治的には「合法」マルクス主義、「経済主義」、組織的には分散主義、手工業主義に深く侵されてしまった。しかも、組織の分散性、手工業性はくりかえされるいっせい検挙というきびしい非合法状態下で拡大されていた、(ハ)しかし同時に、先鋭さを失つたものの大衆運動はロシア全土に拡まりつつあつた——と一面で共通していたが、他面で異なつていた。

したがつて、レーニンが、社会民主主義派の綱領・理論および一定の組織実体を前提として、後退局面において、改良主義者とのきびしい党派闘争をとおして党組織の革命的再編と全国的統一をとくに強調したのに対し、われわれは、綱領も組織実体もほとんど欠いたまま、ほとんど戦術テーゼのみをもって、有利な情勢を最大限利用していかに原始的に党をつくるかという点に最大の問題があつたわけである。

一、こうした編集方針——党建設路線のもとでのわれわれの機関紙活動は、たしかに他党派の追隨を許さぬすぐれた政治経済情勢分析を生み出し、そこから客観的に要求される「あるべき党のあるべき方針」を導き出した。

「安保テーゼ」（『前衛』創刊号）、「学生戦線テーゼ」（同第二号）、「十月闘争の成果と教訓—日本革命の巨大な可能性」（同第四号）、「安保闘争と労働戦線」（同第四号）、「学園階級闘争の危機——これとどう闘うか」（同第六号）、「日本革命の組織問題」（同第七号）、「大衆闘争と遊撃戦の結合へ」（同第八号）、「全共闘運動の任務——あらゆる学園に革命独裁を樹立せよ」（同第十二号）、「擬制の中央権力闘争から都市人民戦争へ」（同第十三号）などは、現在からみれば十分な点があるにせよ、いずれも当時としてはもっとも鋭く適確に客観的な政治経済情勢を捉え、その情勢から要求されるものとしての政治方針を打出していた。そしてまたこれと並行して、結党大会には原則綱領草案およびレジメ、戦略綱領骨子も一応準備提出されたのである。そしてこのような機関紙活動はいったんかなり急速に党のまわりにながりの数の共産主義的活動家およびその集団をひきつけた。だが、にもかかわらず、われわれは、高揚局面においてついにいうに足る党の実体をつく

り出しえなかった。党組織はいつまでも登場してはすぐまた消える共産主義的活動家およびその集団のゆるい結合体のままにとどまったのだ。

そうである以上、われわれの編集方針——党建設路線そのものが、すでにこの時点で破産していたといわねばならない。党をつくりだしえない党建設路線とは一つの形容矛盾でしかないからだ。すぐれた政治経済情勢分析とそこから要求されるものとしての政治路線を組織実体化しえなかったこと、いいかえれば、すぐれた政治経済分析およびそこから要求されるものとして導き出された政治路線といつまでもほとんど増殖しえない劣弱でアナキーなけしつぷほどの組織実体との鋭い矛盾、ここにこそわれわれが深刻に総括すべき全問題の核心があったのである。

一、では、なぜ、われわれはすぐれた情勢分析とそこから客観的に要求される政治路線を組織実体化できなかったのか？それはほかでもない。情勢分析と方針が党主体の情勢分析と方針として提起されておらず、没主体的で客観主義的な情勢分析と方針の提起に終始したところが根本の原因があった。

「宣伝の党から党の実体をつくり出す」という編集方針そのものは当時の条件からして当然のことであった。

機関紙にはなによりもまず無数に生まれつつあった党外の共産主義的活動家およびその集団に正しい情勢分析と方針を突きつけ、党にひきつけることが要求されていたからだ。

しかし、二、三のテーゼをもって結党したわれわれがひとたび党として大衆闘争の戦場に打って出るや否や、わが党自身が「あるべき党のあるべき方針」を実践しえず、それをたんに新左翼諸派とみずから言葉のうえで区別する党派的シンボルとして利用するにすぎないという深刻な状況が生まれてきた。

これは、本源的には、わが党の創立の方法が厳格な党の基準を欠いた安易な寄せ集めであり、とくにそれまでの活動においていわゆる新左翼としても重大な限界を暴露していた旧マル戦派指導者や長いあいだ実質的に実践運動から遠ざかり多かれ少なかれブルジョア的傾向に犯されていた旧日共黨員などをその活動のきびしい自己総括と相互点検を欠いたまま安易に党指導部に受入れてしまったがためであり、またそのごもそれ自身厳格な党的基準を欠いたこの党指導部によって色濃くブルジョア個人主義的傾向をもつ全共闘活動家たちを同じくたんに寄せ集めるに安易に党に受入れつつ、無原則な党運営をつづけたためである。革命的方針はその重みに耐えそれを

担いきる強靱な質の革命主体を要求する。われわれが基本的に正しい客観的な政治経済情勢分析から要求される革命的方針を打出したとするなら、それは当然にもその実現の主体的保証としてわれわれに日共や新左翼諸派が及びもつかぬきびしい基準での党建設、党運営を要求したといわねばならない。しかし、党建設、党運営がこの体たらくでは、方針を実践しえず、たんなる吹き流しとして利用しえなすぎぬというのに何の不思議もない。

そして皮肉なことに、全共闘の実践から学び、民主主義的中央集権制というブルジョア的な組織原則を拒否したわれわれの正しい党組織論が、自然発生的な全共闘に色濃くつきまとった解党主義、分散主義という別の側面のブルジョア的変質の危険にきびしく対決するものとして具体化されなのまま、かえってこのような無原則的でひ弱な党建設、党運営を助長していたのである。批判し乗り超えようとしていた当の新左翼諸派にも劣るこの無原則的でひ弱な党建設、党運営をもってしてどうして革命的方针を実践し、組織実体化しえたであらうか。だからこそ真に問われた安田以後、日大、新宿西口闘争をおいての一〇—十一月決戦準備の過程で、われわれの活動は組織的のみのりない、惨たんたる結果に終ったのである。

そうである以上、『前衛』には、党主体がかかえこんでいるこの重大な組織的欠陥を一刻も鋭くあばき出し、それを克服する任務——党の革命をおおしての党建設の任務——の遂行が問われたといわねばならない。具体的には、機関紙は、個々の闘争についてどこまで方針を實踐し、どこまで実践しえなかったか、その結果どれだけ党建設をかちとったのか、そしてその過程であらわれた限界はどこまでが政治方針自身の欠陥によるものであり、どこまでが組織上の欠陥によるものであったのか、についての党主体の具体的な活動総括をおこなわねばならず、それをおおしてはじめて現実に欠陥を克服して前進しうる党主体の具体的な政治組織路線を打出しえたのである。すなわち、一般的に新左翼を批判するのみでは不十分だった。われわれ自身の内部の新左翼性、その他もろもろのブルジョアの汚物をあばき出し、みずから革命することなしに、ルーズに結集した雲霧状態の共産主義的活動家およびその集団を革命の方針に耐えうる強靱な党の実体に凝縮させ、白熱的な革命的エネルギーを放射するようにすることは不可能だったのだ。

ところが『前衛』は、このような組織的活動を党内部に対して提起し、紙面を党主体のきびしい自己総括、相互点検をもって構成することをしなかった。そしてあい

もかわらず、闘争記事を別とすれば、党主体を欠いた客観主義的な「あるべき党のあるべき方針」をもって紙面を構成しつづけたのである。このような現実にある党主体の實踐との弁証法的関係、すなわち党主体の實踐——認識——再実践、あるいは実践——総括——方針——再実践という関係を欠いた「あるべき党のあるべき方針」は、それに先行する党主体の活動総括を欠いており、そして前提となるその客観的な政治経済情勢分析がいかにも正しいものを多く含んでいるとしても、そのなかにかんじんかなめの党主体の客観的分析を欠落させており、したがってそこから導き出される方針も現実の党主体に即さない抽象的普遍としての方針、ないし党組織路線を欠いた没主体的方針、しかもそれぞれが前段の方針と無関係な方針とならざるをえなかった。それは党外の大衆に党を美化してみせる誇大広告の用は果しても、革命党がみずから真に必要とする党主体の具体的な総括をふまえた具体的方針とは無縁のものであった。それは、かつて追放されたトロツキーが自己の組織をもつこともなくドイツ共産党に訴えかけた「あるべき方針」と同じく、みのりのないものであった。

このように、党の頭脳としての『前衛』がいかにつたないものにせよ現実の生成しつつある党主体内部のきび

しい自己総括、鋭い相互つきつけを欠いたこと、いいかえれば『前衛』が党主体との弁証法的「対話」の関係を欠いたことこそ『前衛』編集方針の、したがってまたわが党の党組織方針の根本的欠陥であったと認めねばならない。

一、だが、さらに立入って反省してみるなら、『前衛』が党にとって死活問題となっていたその任務を果しえなかったのは、編集体制そのもの、すなわち党の闘争主体に外在的な編集委員会の組織に根本的な原因があった。

結党当初において実質的に編集委員会プラス・アルファのみが党的中核であり、他は共産主義的活動家およびその集団にすぎなかったという組織の実状からするなら、編集委員会プラス・アルファと闘争主体の関係が一の矛盾であったことは至極当然であった。編集委員会プラス・アルファは党運営における、同時にまた『前衛』編集における革命的独裁を確立して、全党を前衛的に牽引すべきであった。しかし、それは総括・情勢分析・方針の作成が党の闘争主体とは離れて雲の上でおこなわれるべきであったというのではけつしてない。総括、情勢分析方針の作成は一の組織的過程として、すなわち基礎的闘争過程そのものがそれぞれ主体として遂行し、その総括としての過程を独裁し指導しつつ編集委員会プラス・ア

ルフアが一の統一的な総括、情勢分析、方針に到達し、かつそれを徹底させ物質化するものでなければならなかった。

だが、現実の『前衛』編集、そして総括、情勢分析、方針の作成はほとんどこのような組織的過程としておこなわれなかった。闘争細胞の主体的な総括、鋭い相互つきつけの作業を欠いたまま、『前衛』の執筆編集は、闘争記事は別として、中央委員会の討議にもとづき中央委員、それもほとんど編集委員の個人的請負い作業に委ねられた。そして『前衛』の執筆編集が組織的過程としておこなわれなかったことはつぎのことを意味した。すなわち、中央委員会、そして編集委員会が闘争細胞からのきびしい点検を受けず、その指導責任を問われることなく、闘争細胞もまた中央委員会、編集委員をおおして他の闘争細胞からのきびしい活動点検を、それに機関紙活動のきびしい点検を受けないことをである。これではいかに請負った個人の資質がすぐれていようと、闘争細胞のかかえている障害を克服する生きた具体的な総括をなしうるはずがなく、没主体的、客観主義的な情勢分析、方針の繰り返しに終ったことはむしろ理の当然だったろう。そして外向けには一見立派な情勢分析、方針であっても、闘争細胞のメンバーにとってそれは外的に天から

降ってくるものにはすぎず、その受け止め方は党外のひょうせつ専門の新左翼理論家たちの受け止め方と何ら変わるどころがなかったわけである。

こうしてわが党の機関紙編集体制は最悪のブルジョア的な外的分業関係に墮ちこんでいたのだ。一方に多かれ少なかれ戦闘現場から離れるばかりか、戦闘主体との有機的組織的関係をもたず外的に執筆編集を請負う理論指導部としての編集委員会、他方に天から降ってくる情勢分析、方針を受動的に受けとる戦闘細胞、それにもう一つ、両者の中間に情勢分析、方針をせいぜい党派的シンボルとして、口げんかの材料として暗記して両者を媒介する(?)戦闘指導部としての中央委員会!!このグロテスクな組織体制こそが生成しつつある党を萎えさせ、その飛躍を阻んだ。

二、安保決戦敗北後

一、われわれは七〇年一月安保闘争の敗北と戦後型階級闘争の一時代の終焉を確認して(『世界革命』創刊号巻頭論文)、工場占拠・二重権力・武装蜂起への権力闘争の道のみならず切り開くべくあらたな歩みを開始した。党組織をそれまでの戦線別組織から地区組織へ改編し、

『世界革命』創刊号の諸論文に余すところなくあらわれていた。すなわち、まず巻頭の『前衛』編集委員会アピールは、これまでの『前衛』重要論文とまったく同じに、呼びかけ主体の過去に一言もふれることなく、情勢から客観的に要求されるものとして世界党建設を呼びかけた。つぎの第一論文「反政府闘争から権力闘争へ」は、なるほど活動総括にとりくんではいたが、日大闘争、四・二八闘争、新宿西口闘争をおして大衆反乱戦線内のヘゲモニーを打ち樹て、一〇〜十一月決戦を準備しえなかつたわれわれの限界を鋭く衝くことはできなかった。そして第二論文「つきつけられているものは何か」もまたたんなる世界情勢分析にいきなり党の登場の必要を短絡させた代物にすぎなかった。さいごに、原則綱領草案は書かれたかぎり、新左翼理論家が逆立ちしてもつくり出せない原理的正しさをもっていた。しかし、これも党の政治スケジュールに間に合うように完成されず、とくにかんじんの党組織論が未完成で、党が現実にかかっていた本質的な組織上の欠陥を克服する実践的な効果をもたえなかったのである。そして、これらの諸論文の作成過程そのものがまったく請負的なものであり、しかも第一論文、第二論文とも当然きびしく自己総括すべき當時の主要な闘争の実践指導部によって書かれておらず、そ

中央委員会を若い戦闘メンバーからの補充によって強化するとともに(十二月第一回党協議会)、『世界革命』創刊号を発行し、一・二七政治集会を開催して、世界党の対外的宣言にのり出そうとしたのである。

だが、こうしたわれわれのあらたな党建設路線はみづからの安保闘争の敗北についての深刻な総括を欠いていたがゆえに、根本的な欠陥を含んでいた。

第一に、われわれは安保闘争の敗北をわれわれ自身の敗北として、すなわちたんに大衆反乱戦線の国家権力機動隊に対する敗北としてのみでなく、大衆反乱戦線の公認の指導部の地位についていた急進反政府党としての新左翼諸派をけ落し、みづから指導部の地位につきえなかつたわれわれ自身の敗北として総括する視点を確立していなかった。

第二に、したがって、大衆反乱戦線の指導部への党の飛躍を妨げた内部の本質的欠陥、結党以来のルーズでひ弱な党建設、党運営、とくにそれを党の革命によって克服するどころかそれを助長した没主体的な機関紙編集方針とブルジョア的な外的分業によって成り立っていた党中央体制、なかでも編集委体制そのものの革命的再編を提起してもいかなかった。

われわれのあらたな党建設路線のこうした根本欠陥は、

れどころか実践指導部との立入った討議もふまえておらず、そうであった以上、これらの論文の内容がきびしい自己総括、相互点検をおして革命党建設を提起するものでなかったのは、けだし当然のことであった。

したがって、党の再編はたんなる組織いじりに終り、なんらあたらしい革命的パネを用意することもなく、世界党宣言の党建設路線は挫折したのである。

しかし、このときはじめて一〇〜十一月新宿闘争を主体的に担い、群衆戦の爆発になかば成功することで革命的な質をきたえた学生細胞のなかから形式的で内容のない党建設に反対し、根本的総括を要求する声があがった。それはまだ未熟でただちに党全体を動かす力もたなかつたが、この部分こそがわれわれにとっての安保闘争の最良の組織的遺産、われわれがわれわれ自身の安保闘争の試練のなかからきたえ上げた最良の組織的質であり、党の飛躍を約束する最初の萌芽にほかならなかった。

一、しかしそのご、大衆反乱戦線が解体し、階級情勢が後退局面に入ったことがますます明らかとなり、新左翼諸派が実力ぬきの反政府街頭闘争およびそれと相互補完的な組合主義的、自治会主義的闘争にあとずさりしてゆけばゆくほど、われわれが独自に権力闘争を推進することの困難はますます加重された。そしてその重圧から

党内には政治路線をめぐる陰微な対立が生まれ、中央委員会は権力闘争方針を具体化しえないまま事実上麻痺状態に陥つたのである。

このゆきづまりから、中央委員会にはようやくのっぴきならない形できびしい活動の総括と党内革命が突きつけられた。なぜなら、政治路線上の対立は、口先だけでなく行動において全共闘を革命的に再生させ、工場占拠闘争へ向けて権力闘争をおしすすめようと模索する主としてあたらしい中央委員たちに対して、これまできびしい自己総括を回避し、方針をたんに党派的シンボルとして口にしながら、実践的には新左翼諸派の内部にその尻尾ないしせいぜい別働隊としてとどまっていた旧実践指導部の一部が、これまでと同じように権力闘争方針をたんに口にするだけでその実践化を放棄し、右へ右へ逃亡する新左翼諸派を追いかけていこうとして、サボタージュによる陰然たる抵抗に出たことによるものだったからである。もはやきびしい総括と党内革命をおして党の本質的な組織上の欠陥を正し党そのものを革命的に再編する以外に党の前進はありえなかつた。

こうしておくれにおくれなすえ、いくつかの戦闘細胞からの突き上げを起爆剤として第一次党内革命が開始された。

向けての権力闘争をおしすすめる革命党へ、いいかえれば、「口先の前衛から実践の前衛へ」の現実的な第一歩を踏み出す条件を準備した。共産主義武装行動委員会の建設こそはそもそも重要な成果にほかならない。

しかし、第一次党内革命において編集委および「前衛」の發揮したイニシアティブには重大な限界があり、それがつきよく第一次党内革命そのものをきわめて不徹底かつみのりの少ないものとしたのであつた。

第一に、「前衛」四〇号福原論文の問題提起は、山内などに対する事前の中央委員会その他での同志的突きつけをまったく欠いており、中央委員会の了解を無視して不意打ちに発表した論文では、いきなり組織的排除を事実上提案した。これは「病いをなおして人を救う」態度——党の健康を守るために不可欠な大小不断の党内革命を實行するばあいの大原則——に欠けるものであつたといわざるをえない。

15 党機関紙の任務はなにか

第二に、それは、新左翼体質ないし自然発生的な全共闘体質との非妥協的な闘争が必要であつたにせよ、わが党自身の活動の総括を正面に据えることなく、そのかわりに「旧マル戦派体質」という出自に焦点を当て、旧マル戦時代の活動の欠陥をおもに取り上げて批判するという方法をとっており、これまた党内革命をすすめる方法

そしてこの第一次党内革命において編集委員会および「前衛」は一定の積極的役割を果たした。党内革命の口火はわれわれの内なるカンパニア的日和見的体質を衝く福原論文「共産党原則綱領草案と党建設」（「前衛」四〇号）によって切られ、「労学反乱全共闘革命派連合の結成にむけ行動委員会総武装をおしすすめよう」（同四二号）ははじめて安保闘争の敗北が大衆反乱戦線内部におけるわれわれの新左翼諸派に対する敗北でもあるという意味で「二重の敗北」であることを確認し、さらに編集委員会は拡大中央委員会においてはじめて、われわれの死活にかつた重大な闘争、法大闘争の総括をきびしくおしすすめるイニシアティブをとりつつ、「前衛」紙上での公然たる論争によって——福原「何を総括し何を克服するか」、南部地区委「権力闘争を担う主体へ、党内革命をさいごまで貫徹せよ」（同四六号）——対立点を明確にし、日和見的潮流の暴露と克服に全力をあげたのであつた。そしてその総括のなかで真摯な態度をとらず、むしろ総括を回避して論争点を外らせ、保身をはかろうとした中央委員山内の孤立化とけつきよくにおける追放をかちとつた。

この党内革命をおしてはじめて、わが党は新左翼諸派との苛借ない党派闘争による実践的決別、工場占拠へ

として正しいものであつたとはいいたい。

だが、第三に、より根本的にいうなら、それは総括と事実上緊急の必要となつていた「旧マル戦派体質」の追及のみに限定し、いわばそれを長いあいだ許してきたいっそう総体的で本質的な組織上の欠陥——外在的な編集委員会と没主体的な「前衛」に集中的に表現される党建設、党運営の欠陥の総括、追及にまですすめえなかつた。そして党中央体制、機関紙体制の革命的再編によって「実践の前衛」にふさわしい党中央体制、機関紙体制を創出することができなかった。第一、第二の無原則的な党内革命の提起そのものがじつはそうした組織上の欠陥の反映でもあつたといわねばならない。それゆえ、前衛四〇号福原論文は以降の党内革命、党建設の基調とはなりえなかつた。なお、福原論文「何を総括し何を克服するか」（「前衛」四六号）は、さきの四〇号論文とは異なり、われわれの敗北こそ総括の試金石であると強調しつつ、はじめて五点の例をあげて中央委員会の責任をとりあげた積極的なものであつた。しかし、それもなお、実践的日和見主義と組織的無責任体制を鋭く衝きながら、それを長いあいだ許してきた主体の総括を欠いた「前衛」論文の方針提起を、そしてそうした論文を生んだ外在的な編集委員会そのものには批判的焼刃は向けな

ったのである。

しかし、このときには編集委の外から総括をさらに深めるような革命的イニシアティブはあらわれなかった。そのような党主体は戦闘細胞のうちいまだ形成されていなかったからだ。

第一次党内革命の根本限界は、けっきょく、まさに革命さるべき編集委員会が革命の主体としてあらわれねばならなかったことによるものであった。かくて、第一次党内革命は多分に最悪の日和見主義的分子の切り落としのみに限定され、十分強力な党建設の革命的パネとはならなかったのである。

一、第一次党内革命の過程をとおして編集委員会と『前衛』は党主体との「対話」を開始し、われわれの党の現実の活動を総括し、われわれ自身のもつカンパニアの日和見の体質をあげき出し、われわれ自身を「実践の前衛」へ革命するうえでたしかに一定のイニシアティブを發揮した。だが、『前衛』編集方針の転換はなお目的意識のかつ全面的なものではなかった。第一に、それは、自分自身に対して総括の鋭いメスを入れようとはしていなかった。そして編集委員会と『前衛』が第一次党内革命でとったイニシアティブの限界、そしてそれが規定した第一次党内革命そのものの不徹底、限界は、七〇年九

月以降の階級情勢の変化とわが党の実践およびそれをおしての党組織にあらわれた重要な発展とによって現在の党の飛躍を阻む主要な障害として立ち現われるに至った。なぜなら、第一に、階級情勢はこれまでの学園闘争と反政府街頭実力闘争を軸とした大衆反乱戦線のいっその後退と停滞の局面の性格を明らかにし、そのなかで新左翼諸派の反政府カンパニア急進主義||組合主義・自治会主義路線と蜂起し革命戦争路線への分化が明らかとなり、しかも後者の混沌と前者の「第六の党」などとしての一定の定着傾向がみられる。こうした状況のもとでは、もはやわれわれ独自の運動と組織実体の創出拡大なしにたんなる「あるべき党のあるべき方針」の宣伝によって外部の広汎な共産主義的活動家およびその集団を党に結集することなどはしない。

第二に、この状況のもとで、学園闘争の停滞を学園闘争自身で革命的に打開し、革命的全共闘の再生をもちとることに直接の展望はないが、他方、工場労働者がじょじょに自然発生的な職場反乱闘争をとおして権力闘争の戦列にあらわれはじめており、われわれは全力を集中し一刻もはやく立上がりつつある全労働者に道を照らし出す持久的工場遊撃戦の成功的展開と工場根拠地の建設、それを前衛的に担う工場党の実体をつくり出すことによ

って、工場占拠総反乱へ向けて全局面を打開するヘゲモニーを掌握しなければならぬ。そして機関紙誌こそはそのための宣伝者、組織者として目的意識的に活用されねばならない。だが、工場反乱の組織には、自由平等な市民社会におけるのはまったく異なる複雑な工場職場の生産関係、勢力配置に応じて綿密具体的な方針の設定とそれにもとづく工作が必要である。その困難は学園反乱の組織における困難とは比較にならない。そしてこのような任務はどうしてこれまでのようなブルジョア的外的分業のうえに立つ編集委と「あるべき党のあるべき方針」の請負い執筆編集によって果されうるものではない。工場細胞およびみずから労学行動委員会運動を推進する工場工作細胞として位置づけた学生細胞自身が執筆編集主体となり、みずから直面している状況に応じて具体的方針を打ち樹て、実践し、さらにそれを総括するといふ過程そのものを機関紙誌に反映することによって、そしてそれを保証する機関紙体制をつくり出すことによつてこそはじめて果されるであろう。

第三に、われわれは、七〇年九月以降の実践をとおして、党主体として小さいながらもこうした任務を担いうる実体をつくり出し、これまで独裁的なヘゲモニーをもつてきた編集委員会に対してそれが集中的に表現してい

たわが党に本質的な組織上の欠陥をそれ自身の闘争と組織運営によって明らかにし、それを止揚する現実的条件をもつ複数の自立的な革命的イニシアティブをはじめめて端的に党内にもつようになった。A地区党と共産主義武装行動委員会およびその指導部がそれである。

A地区党は、第一次党内革命からは相対的に独立に、朝日無線、志村化工、全通大崎、菱和自動車などが党の過去の労働戦線の苦渋の経験を独自に総括し、とくに七〇年初頭に労学行動委員会の突入によって独自の職場反乱闘争を切り拓こうとして切り拓きえなかつた大崎闘争の玉砕カンパニアの限界——これも、主観的にはともあれ、客観的には持久戦の具体的で明確な展望とそれを支える強靱な組織体制の準備を欠いた結果であった——を乗り越えて、行動委員会による綿密な計画にもとづく持久的工場遊撃戦を日電府中においてはじめて成功的に展開するとともに、みずからの行動委員会、党の組織建設・運営をもきびしいプロレタリア基準をもって律するようになつてきた。これは党全体にすすむべき道をようやくはつきりと照らし出したものといわねばならない。七〇年初頭から工場占拠へ向けての権力闘争を打ち出し、また五月から労学反乱行動委員会運動を呼びかけながら、われわれ自身がそれを実体化しえなかつたのには、従来

からの組織上の欠陥が桎梏となっていたばかりか、われわれがこのような成功的な運動と組織実体をもたず、したがってまた方針そのものが具体化できぬまま一般的抽象的なものにとどまっていたからであった。

また、共産主義武装行動委員会とその指導部は、第一次党内革命の直接の成果として創出されたが、学園での革共同中核派とのきびしい武装党派闘争と東海大、法政大、明学大などにおいて国家権力機動隊、右翼、ガードマンによる学園戒厳体制に真正面から挑戦する流動的制圧の遊撃闘争を結合して闘い、安保階級闘争がつきあたりそのまえに敗北した支配階級・国家権力の壁およびそれを内部から敗北に導いた敵を突破粉碎する第一歩を踏み出すとともに、それに耐えうるきびしい行動委員会、党の組織建設、運営の質をみずからつくり出してきた。そしてまたその闘争と組織の質をもって現在工場労働者と具体的に結合し、独自に職場反乱闘争をきりひらこうとしている。これまた新左翼諸派との党派闘争と工場占拠へ向かう学園権力闘争の戦術の第一歩をみずから開発するとともに、それ自身の闘争と組織運営によってわが党に本質的な組織上の欠陥を別の側面から浮かび上がらせたものといわねばならない。

だが、現在まで編集委員会とその機関紙誌執筆編集が

旧来のやり方をつづけているため、編集委員会に依存しない複数の自立した革命的イニシアティブが端緒的に成立したという党の飛躍を約束する積極的な成果が、機関紙誌に十分反映されず、かえってマイナスにさえ働くという逆説を生み出しているのだ。その具体的な表現が福原「工場占拠闘争の総路線」(『前衛』第五七、五八号)にほかならない。

わが党の今後の総路線を確定しようとするこの論文はこれまでと同じく、第一次党内革命以降の、とくに一月党協議以降の党活動の総括を全党の組織的協議、とくに革命的イニシアティブを発揮しはじめた複数の党細胞とのあいだの協議を欠いて、外在的な編集委員会体制とその個人的請負いによって作成された。そして、作成そのものがこのように一の組織的過程としておこなわれなかつたことから当然に、その内容にもこれまでどおりの重大な欠陥があらわれずにはいかなかったのである。なるほど、この論文は従来とは異なり、意識的な党文書として党活動の総括をおこない、そこから方針を導き出そうとしている。しかし、その総括、とくに七一年一月党協議会以降の活動総括がその前進、積極面としてあげたのはただわれわれの党主体とは組織的関係のない新左翼的ないし無党派の労働者大衆の自然発生的反乱闘争を編集委

員会が総括して政治路線上の教訓を引出したというものにすぎず、党主体の実践そのものはなんら具体的に総括されず、ただ、党体制の建設がおくれていること、新左翼との党派闘争が学生戦線においてさえ貫徹していないことが指摘されているにすぎない。これでいったい明日からの党主体の実践に役に立つ党主体の総括といえるだろうか？ とくに複数の革命的イニシアティブが成立してきたばあい、それぞれについてその革命的イニシアティブ自身の成果と限界をきびしく総括点検することが、先進的な経験を党全体に普遍化するために、そしてまたより重要なことに党の統一を維持し高めるために、党にとって死活問題である。それを欠いていることこそこの論文の致命的欠陥といわねばならない。だが、それはいうまでもなく編集委員会、執筆者の個人的自覚、決意によっておこないうるものではなく、作成過程そのものが一の組織的過程として取り組まれることによつてはじめて可能になることなのである。そして、この論文は、このように党に真に必要な党の活動とその組織体制の具体的総括を欠いているがゆえに、工場占拠闘争の基本的陣型、工場占拠闘争を担う党体制、党機関紙の任務と体制などについていくたの鋭い提起をしながらも、その貢献は主として理論的なものおよび大目標に関するものに

とどまり、当面の方針としてはけっきょく、「現にあるわれわれの党組織、その影響下にあるわれわれの部隊」に即してそれが直面している壁を打開する具体的政治組織路線が提起されているとはいいがたいのである。

一、以上から明らかのように、ブルジョア的分業にもとづく外在的な編集委員会とその党主体のきびしい自己総括・相互点検を欠いた没主体的な内容の機関紙誌執筆編集こそが、そしてそれに集中的に表現された全党の組織体制と組織活動の欠陥こそが、現在わが党の飛躍を阻んでいる主要な桎梏、主要な死重にほかならない。

われわれ編集委員会は、これまで党の運営において事実上の中央指導部として存在していたものとして、こうした組織上の欠陥の重大性に追及されるまで十分気付かず、長いあいだ放置してきた責任をここに深刻に自己批判する。そして、このような編集委員会とその機関紙誌編集の重大な欠陥と表裏をなして存在する地区党、細胞のなかの没主体的依存性、あるいはまた地方主義、分散主義に対して非妥協的な突きつけをおこないつつ、党中央体制とその活動を軸とした全党の組織体制と組織活動の革命的再編を提起しなければならない。

B・ルーズで不規則な情報集中・制作発行・配布・集金活動とその体制

一、七〇年一年間の紙誌製作・発行・配布・集金などの活動の実績はつぎのとおりであった。

(中略)

一、このような機関紙活動に積極的成果を見出すことはほとんどできない。六月までともかくも週刊を實行しえたことぐらゐであろう。だが、編集委員会のこの側面での機関紙活動は、要するに、つくりっぱなしに近く、しかも製作発行自身きわめてルーズで不規則なものでしかなかつた。そうしてこれと表裏をなすものとして地区・細胞の機関紙活動はなほだ低調で、黨員自身十分読んで組織的に検討することがなく、集金などは皆無に近かつた。

レーニンは新聞の役割についてつぎのように正しく指摘している(『なにかからはじめべきか?』)。

「新聞の役割は、ただ思想をひろめることだけに、政治教育をおこない政治的同盟者を引きつけることだけに

だが、われわれのこれまでのルーズで不規則な機関紙活動では、『前衛』が「集団的組織者」としての役割を果したとはいえず、「新聞に助けられ、新聞と結びついて・・・恒常的な組織がおのずから形づくられ」もしなかつたのである。

一、このような機関紙活動の欠陥は、まったく機関紙事務体制——情報集中・製作発行・配布・集金およびそれらの相互点検機構——の確立の失敗によるものであつた。

そしてこの失敗は、いうまでもなく、主要には外右的な編集委員会と党主体の活動総括を欠いた没主体的な内容の機関紙執筆編集体制とそれに規定された機関紙内容の本質的欠陥と無縁のものではなく、まさにその直接の結果にほかならなかつた。すなわち、機関紙誌の執筆編集がブルジョア的外的分業に委ねられ、したがってまたその内容が党主体の血の通った痛苦の総括を欠いた客観主義的な方針提起であつたがために、地区党、細胞は機関紙をみずからの機関紙として、機関紙活動をみずからの組織活動の基軸としてとりくもうとはしなかつたからである。

だが、この失敗の原因をたんにそのみに解消することとはけつてできない。いま一つ、そうした機関紙事務

かぎられるものではない。新聞は、集団的宣伝者および集団的煽動者であるだけでなく、また集団的組織者でもある。このさいこの点では、新聞は建築中の建物のまわりに組まれる足場にたとえることができる。それは、建築の輪郭をしるし、個々の建築工のあいだの連絡を容易にし、彼らが仕事の割りふりをおこない、組織的な労働によってなしとげられた共同の成果を概観するのを助ける。新聞に助けられ、また新聞と結びついて、地方的活動だけでなく、規則正しい共同の活動は、自己の成員たち、政治的諸事件を注意深く観察し、それらの意義やいろいろの住民層に対するそれらの影響を評価し、革命党がこれらの事件に働きかけるための目的にかなつた方法をつくりあげる習慣をつけさせる。新聞に対する材料の規則正しい供給と、新聞の規則正しい配布とを確保する。という技術的任務だ。一つのためにも、単一の党的地方的受任者——たがいに生き生きとした連絡をたもち、全般的な事態に通じており、全国的活動の細分された諸機能を規則正しく遂行することに慣れており、あれこれの革命的行動を組織することで自分の力をためす受任者たち——の網をつくりださなければならなくなる。この受任者網は、まさにわれわれに必要な組織の骨組となるであろう。」

体制の確立を主要に推進すべき編集委員会の組織活動の不十分——というよりその欠如をあげねばならない。なぜなら、ブルジョア的外的分業関係のもつても、ブルジョアのマス・コミ諸組織は、そしてまた多かれ少なかれ同じ質をもつた新左翼諸派の機関紙組織は、それなりに情報集中・製作発行・配布集金およびその点検機構をつくり出しているからである。

われわれ編集委員会はみずからそのような事務技術的活動を恒常的に担う中央特殊細胞として確立する努力を真剣におこなわず、またおこなつた限りでも、そのこの組織運営において、戦闘現場から多かれ少なかれ離れた、したがってブルジョア的変質の危険のとくに大きい特殊細胞として当然に要求されるきびしい内部の相互点検を怠つたため、ついに細胞としての確立に成功しえなかつた。そして、個々人の任務分担もあいまいなまま、党の実践的要請を無視した党文書執筆における職人的テノンポ、厳格な組織活動の一環としての位置づけを欠いた無原則的な他の分野での執筆活動および同じく無原則的な他の広汎な分野での活動請負いも加わつて、編集委員会は地区党・細胞に対して情報集中・配布・集金の組織ルート、組織慣習確立のためのイニシアティブをとらず、それどころかきわめてルーズで不規則な製作・発行によ

って地区党・細胞の恒常的な情報集中・配布・集金などの組織ルート、組織慣習の確立を阻んだのである。

(中略)

ともかく、この結果、情報集中は自然発生的な個人的偶然的ルートにたより、機関紙のために定期的に連絡する組織ルート、組織慣習は育たず、したがって配布集金もほとんど成り行き任せ、編集委員会と地区党・細胞間の系統的な相互点検もおこなわれない状態がつづいたのである。

この意味で編集委員会こそわが党の組織上のひ弱さをもっとも極端に表現していたといわねばならない。

一、なお、七一年一月以降、編集委員会は以上のような機関紙事務体制の欠陥を克服するために、若干の改良の努力——その欠陥の根源を明確に認識していなかったがゆえにそれはまさに改良の努力であった——を払った。だが、それは当初実現しようとした機関紙事務体制の確立にすすみえず、かえって機関紙体制とその活動全体の本質的な欠陥をはっきりと浮かび上がらせたのであった。ここでは重複を避け、それをおして浮かび上がった地区党・細胞の側の機関紙活動の欠陥についていくつかの点を指摘しておかねばならない。

(中略)

一、以上から明らかなように、ルーズで不規則な機関

紙事務体制とそれによる情報集中・製作発行・配布・集金活動が、そしてそれに集中的に表現された全党の組織体制と組織活動の欠陥が、現在わが党の飛躍を阻んでいるもう一つの桎梏、もう一つの死重にほかならない。そしてそれは、さきに指摘した主要な桎梏、主要な死重——外的な編集委員会と没主体的な内容の機関紙執筆編集——の結果であると同時に、またそれからは相対的に独立に、編集委員会の組織活動の不十分、というよりその欠如の結果でもあった。

われわれ編集委員会は、こうしたみずからの組織活動の欠陥についても同時に自己批判する。そして、このような編集委員会の機関紙事務活動の欠陥と表裏をなして存在する地区党・細胞のなかのルーズで不活発な機関紙活動、総じて機関紙活動を基軸としないルーズで弱体な全党の組織活動とその統一の欠如に対して非妥協的な突きつけをおこないつつ、同時にこの側面からも全党の組織体制と組織活動の革命的再編を提起しなければならぬ。それなしには機関紙の執筆編集体制とその活動の革命的再編は空語に終るだろう。

的組織的な武器とならねばならない。

第二に、そのための体制として、『前衛』『世界革命』の執筆編集および情報集中・配布・集金の主体を戦闘主体、すなわちまさに行動委員会による持久的な工場遊撃戦、工場根拠地建設、工場細胞建設にとりくむ地区党、細胞自身とし、これら地区党、細胞の組織活動と組織体制を機関紙活動を軸とした組織活動、機関紙体制を軸とした組織体制に革命的に再編しなければならぬ。そしてそれを機構的に保証するために旧来の中央委員会、編集委員会を解体し、あらたに中央委員会＝編集委員会および機関紙局を創出しなければならない。

A. あらたな編集方針とその体制

一、わが党の現在の政治組織路線は、組合主義と鋭く対決する秘密行動委員会、組合内の戦闘分子と結合しつつ組合主義に対決する過渡的な組合内行動委員会、および労学行動委員会などによる持久的な工場遊撃戦の展開、戦略的布陣へ向けての工場根拠地建設、その前衛として方針を保証し、闘争の先頭に立つ不拔の組織としての工場細胞建設である。

同志諸君！
わが党の組織活動と組織体制上の本質的な欠陥を正すために、そしてあらたな情勢とわが党のあらたな政治路線に応えるために、機関紙活動と機関紙体制をいかに再編すべきか？

われわれは、『前衛』『世界革命』を工場党建設のための組織機関紙誌へ革命的に転換させることを提案する。すなわち、まず第一に、情勢に応じたわが党の現在の政治組織路線は、行動委員会による持久的な工場遊撃戦の展開、戦略的布陣のための工場根拠地建設、その前衛としての工場細胞建設であり、『前衛』『世界革命』は、党の紙面をこの目的に即して構成し、また発行頻度を高め定期発行を実現して、その政治組織路線の実践の政治

II 方針

『前衛』『世界革命』を工場党建設の組織機関紙誌へ

『前衛』『世界革命』はその紙面をこの目的に応える主要な政治的武器として編集構成されねばならない。したがって、われわれはそれらについてつぎのようなあらたな編集方針をとるべきである。

第一に、機関紙誌は、なによりもまず、工場党建設に全力をあげてとりくむ党主体、すなわち、秘密行動委員会、過渡的な組合内行動委員会などによる持久的な工場遊撃戦とおして工場党建設にとりくむ労働者細胞、および労学底辺委員会運動をおして工場党建設にとりくむ学生細胞自身の、そしてそれらの結合としての地区党自身の活動のきびしい総括、普遍化および方針提起との相互点検、相互突きつけの場となるよう、そのような党文書をもって編集構成されねばならない。

第二に、機関紙誌は、同時にまた、職場・学園での敵の攻撃、党および行動委員会の反撃、そして中間的大衆の動揺と流動などの生き生きした経験の交流の場となり、党と行動委員会大衆が生きた具体的経験から学ぶのを保証するよう、とくに工場職場に重点を置いた現場レポート、闘争記事、闘争アピールなどをもって編集構成されねばならない。

こうした生き生きした現場レポート、闘争記事、闘争アピールなどは、党文書が多かれ少なかれ理論的普遍化される露としての理論闘争の文書をもって構成されねばならない。

このような情勢分析、理論闘争文書も目的意識的に工場職場での党主体の立場から発し、またそこへ集約されるものでなければならぬが、それらのたすけがあつてこそ、地区党・細胞の活動総括、方針提起は孤立化ないし一面化せず、全体のなかに正しく具体的普遍として位置づけられようといえよう。

以上のような紙面の編集構成によって、機関紙誌は工場党建設へ突進する現実の党主体との緊密な「対話」をもつものに、いかえればそうした党主体の自己対象化、自己認識の手段になり、そのようなものとしてはじめて工場党建設のための主要な政治的武器となる。

一、このあらたな編集方針のもとに、機関紙誌それぞれの任務を立入って確認すると、

第一に、中央機関紙『前衛』こそは、その紙面のすべてを以上にあげた三つの課題を、第一の課題を主軸としてつと担うものとして編集構成されねばならない。それは、そのようなものとして、読者対象を労働者階級一般、革命的活動家一般ではなく、なによりもまず「工場へ、労働者大衆の中へ」を合言葉にした党員およびその影響下にある先進的行動委員会大衆に置く。そしてみずからの

た文書として読者の理性的認識の深化発展を助けるのに対し、闘争現場の息吹きを伝える文書として主として読者の心に共鳴をおこし、その感性的認識——気分、直観などの深化発展を助ける。こうした豊富な感性的認識の土壤なしには正しい理性的認識も保証されえないのだ。

だが、このような生き生きした現場レポート、闘争記事、闘争アピールなどは、総括——方針提起の党文書が汲みつくしえなかつた闘争現場、とくに工場内部の無限に複雑な状況を真に具体的に映し出すとともに、それはまさに読者である党員および行動委員会大衆の現実の意識状況——純粹培養の革命的共産主義的意識ではなく、革命的共産主義的意識と市民的体制的意識の葛藤としてある——に即して書かれるがゆえにいいかえれば多かれ少なかれ彼らの市民的体制的意識に譲歩し、その論理を利用して書かれるがゆえに、心に鮮烈な共鳴を引きおこす。その意味で、われわれは、これらの文書は必ずしも厳密な党文書ではなく、第一の党文書とは矛盾する性格をもつことを知っておかねばならない。

第三に、機関紙誌は、地区党・細胞の個々の党文書が必ずしも十分に保証しえない、世界的ないし全国的政治経済情勢分析、それをおしての支配階級・国家権力と社共および新左翼諸派など労働者階級内部の敵の鋭い暴実践を総括し、つき当たっている壁をいかに打開するかをみずから明らかにし、しかもそれを相互に突きつけあうという作業を主軸としてわれわれの工場党建設の主要な政治的武器とならねばならない。そしてその作業のきびしさ、真剣さ、ダイナミズムによって、また生き生きした現場レポート、闘争記事、アピールの魅力によって、同時にまた外部の広汎な共産主義的活動家をもはじめてひきつけることができるであらう。

第二に、『世界革命』は、党の中央理論機関誌として、主として第一の課題のうちこれまで『前衛』がある程度果してきた、一定期間の党全体の活動総括、情勢分析、政治組織総路線の提起を、党会議に厳密にもとづくものとして継承吸収し、また中断されたままの原則綱領・戦略綱領作成作業、とくにそのための党内部の創造的な論争の場となるように編集構成されねばならない。

第三に、中央党報、それに地区党報などは、組織内での自己総括、相互点検、相互突きつけを精力的に『前衛』紙上でおこなうとすれば、対権力関係からその他から公表すべきでない部分についてそれを補足するものとすべきである。

第四に、現在さかんに発行されつつある大衆行動委員会段階での新聞、パンフレット、ビラなどはいっそうそ

の発行を積極化し、『前衛』『世界革命』の豊富な基盤とすべきである。それらの新聞、パンフレット、ピラなどの豊富な山のうえに中央機関紙誌が存在するようにつとめねばならない。

これはたんにわれわれが各地区・各細胞が自由な主体であることを組織原理としているからばかりではない。中央機関紙『前衛』が第一の課題を主軸として編集構成される以上、そしてまた意識水準のそれぞれ異なる大衆グループのそれぞれを普遍的にひきつける手段などそもそも存在しない以上、それは大衆的な宣伝煽動の武器としては不十分な役割しか果たしえないからである。一般的な反政府闘争課題に向けての、またとくに個々の工場での職場闘争課題に向けての効果的な宣伝煽動は、働きかけようとする大衆自身の意識状況——彼らは行動においてはすでに市民的秩序的の枠をのりこえつつあっても、意識においてはなお市民的体制的枠内にとどまっている——に即して、いいかえれば彼らの市民的体制的意識に譲歩し、その論理を借りて、おこなわねばならない。その意味で、大衆行動委員会段階での新聞、パンフレット、ピラなどの役割はきわめて大きい。これらこそ大衆的宣伝煽動の主要な武器にほかならない。

これまでわれわれは、十分突っこんでみることをせず

外的に活動を総括され、方針を与えられるはずがないからである。

われわれは、これまで行政的地区割りにすぎなかった地区党をそれぞれ首都圏の蜂起を担う自立的な戦略単位として地区党として明確に位置づけなおし、それらの代表に共産主義武装行動委員会の指導部としての党細胞およびのちにのべる機関紙局細胞の代表を加えて、恒常的な相互点検、方針決定をおこなうあらたな中央協議機関としての中央委員会を新設する。そしてこれが同時に中央機関紙誌の編集の全責任を負う。これを保証してこそ、工場党建設へ向かう地区党は、したがってまた戦闘細胞は、真にみずから決定しみずから行動する主体となりうる。戦闘単位としての地区党の主体性を基礎とするこの中央委員会Ⅱ編集委員会の確立こそがあらたな編集方針の貫徹を保証し、この面から党の飛躍を準備する第一の組織的環である。

だが、地区党の党的質はいちじるしく不均質であり、工場党建設へ向かうその活動にもまた先進後進の差がいちじるしい。したがって、現実の中央委員会運営は、工場党建設へ向かう目的意識性、その活動の革命的衝動性、そしてそれを支える組織性にすぐれた部分の革命的イニシアティブによる革命独裁とならざるをえず、したがっ

に、中央機関紙『前衛』を単純に党建設と大衆的宣伝煽動の二つの役割を担うものと観念していた。その結果われわれは党主体からいっさいを判断し、いっさいを党主体に集約する厳密な党文書も書けず、かといって大衆的意識に即した生き生きした大衆行動委員会的な宣伝煽動文書も書けなかった。両者の中間のあいまいな文書を書いてきたのである。われわれはこの機会に二つの文書の性格の相違をはっきりと知り、大胆におのおの書き分ける技術をおがものとしなければならぬ。そうしてこそはじめてわれわれは党建設と大衆行動委員会建設の主要な武器を二つながら手中にし、両者を並行的にすすめるのである。

一、このあらたな中央機関紙誌編集方針を担う組織体制として、われわれはブルジョア的的分業関係にもとづく現行の中央委員会、編集委員会を解体し、あらたな中央委員会Ⅱ編集委員会をつくり出さねばならない。

中央機関紙誌が工場党建設へ向かう党主体の、地区党・細胞のきびしい自己総括、相互点検、相互突きつけの党文書を主軸として編集される以上、執筆編集主体はいうまでもなく工場党建設へ向かう党主体自身、地区党・細胞自身でなければならぬ。なぜなら、みずから決定しみずから行動する自由な主体としての細胞・地区党が、てまた中央機関紙誌の執筆編集もまた同じ部分の革命的イニシアティブによる革命独裁とならざるをえない。中央委員会を革命独裁し、牽引する部分こそが党の中央指導部にほかならず、その確立こそ中央委員会の革命的機能を保証し、したがって機関紙誌のあらたな編集方針の貫徹を保証し、この面から党の飛躍を準備する第二の組織的環である。

ただ、地区党の組織的現状からするなら、地区党の任務から解放された中央指導部の創出は無理であり、われわれは、革命的イニシアティブを発揮する諸部分が当面相互にとくに緊密な協議、相互突きつけをおこないつつ指導責任を負うとともに、強力で人的余裕をもつ工場党の実体を建設することをおして、一刻もはやく地区党の任務から解放された常任的な中央指導部を創出するのを促進しなければならない。

B. あらたな機関紙事務と

その体制

一、いうまでもなく、たんなる編集方針とその体制の再編だけでは不十分である。われわれは機関紙事務とその体制をも同時に再編しなければならない。そして中央

機関紙誌、とくに『前衛』を工場党建設のための主要な組織的武器としなければならない。

われわれは、中央機関紙誌の製作発行・配布・集金・資金調達についてつぎの計画を提案する。

(イ)発行計画

『前衛』(大版のみ)……年二四回

『世界革命』……年四回

とくに、『前衛』の紙面をあらたな編集方針の要請に応えるようにすることは、現行の月一回不定期発行では不可能で、月三回と頻度をあげ、しかも定期発行を保証することが不可欠である。そうしてこそ『前衛』は工場党の組織者に、すなわち工場党建設のたんなる政治的武器でなく、組織的武器にもなりうるのである。

(ロ)配布・集金計画(略)

(ハ)資金計画 (略)

一、このあらたな中央機関紙の情報連絡・製作発行・配布・集金・資金計画を担う組織体制として、われわれは地区党・細胞の機関紙事務活動を確立し、それを事務的に統轄するものとしてあらたに機関紙局を新設する。

中央機関紙誌の情報連絡・配布運用・集金の主体もまた地区党・細胞自身である。そして中央機関紙誌、とくに『前衛』のために定期的に情報を集中し、連絡し、頻

度高く定期発行される『前衛』の規則正しい配布運用・集金をみずからおこなってこそ、そしてみずからの組織活動をそれを軸とする組織活動として確立してこそ、地区党・細胞のみずからを真に組織者として確立することができるであろう。これこそが機関紙誌発行計画を根本において保証する第一の組織的環である。

われわれはこれまでのこうした規則正しい機関紙活動の組織慣習の欠如を考慮して、とくにこの点を強調しなければならぬ。多くの同志諸君はこれまでのルーズでアナーキーな組織慣習——それがけっきょく党のひ弱な組織性の根本原因となっていた——に慣れ、いまだにこうした規則正しい機関紙活動の必要性を軽んじ、せいぜいたんなる無味乾燥な事務活動ぐらゐに観念しているかも知れない。しかし、それこそ重大な誤りである。そのような観念を根本から改め、精力的に原則的恒常的な機関紙活動にとりくむことなしに、党の組織的質を革新し、強力な中央体制をつくり出し、かつ爆発的な増殖力を生み出すことは断じてできないだろう。

地区党・細胞はこれを具体化するため、つぎのことを実行しなければならない。

(イ)まず全員がよみ、定期的にその内容を組織的に検討し、そうすることでみずからを組織する武器として活用め、常設事務所と情報連絡・相互点検ルートの創出をおこなわねばならない。戦闘細胞の組織活動に密着したとくに工場細胞の要求に応える『前衛』の月二回定期発行を保証するためには、常設的な機関紙局を焦点として地区・戦闘細胞とのあいだに戦闘組織活動に関する基本の情報連絡・相互点検機構から相対的に独立したが独自の情報連絡・相互点検ルートの創出が絶対不可欠である。これこそが機関紙発行計画の貫徹を保証する第二の組織的環である。

(中 略)

機関紙局はこうした活動をとおして、けっきょく、中央委員会―編集委員会をとおしておこなわれる地区党の恒常的な自己総括・相互点検を豊富に補足することとなり、革命的ダイナミズムに溢れた党組織の有機的統一を強力に保証することとなる。

同志諸君！

以上がわれわれ編集委員会の第二次党内革命に応える機関紙活動総括であり、あらたな機関紙活動方針である。総括を深め全党のものとして確認したうえで、工場党建設のかなめとして、機関紙活動の革命的再編に全力をあげるともにとりくもう。方針の貫徹を保証する四つの組

するとともに、さらに影響下にある大衆を組織する武器として活用する。

(ロ)機関紙担当者をきめる(形式的に別に定めるより、当面は地区・細胞キャンプが兼ねるのが現実的だろう)。

(ハ)そのメンバーが機関紙局とのあいだに週一回の定期連絡ルートをつくり出す。

(ニ)そのうえで、配布ルートをはっきり確認し、機関紙局とのあいだに、原稿についての打ち合わせ、新聞全体についての意見交換、および機関紙活動の相互点検を恒常化する。

(ホ)固定読者獲得の目標を党のオルグ活動計画のなかに織りこんで設定し、それにとりくむ。厚い固定読者網の創出は党の政治的影響力拡大のかなめであり、また機関紙財政の安定の鍵でもある。

(ヘ)それらをとおして中央機関紙が現在の変則的な資金計画状態をぬけ出し、みずからの足で立つ資金の基盤を創出する。

一、機関紙局は製作発行の技術的任務および組織外の配布・集金の任務を担うとともに、こうした地区党・細胞の機関紙活動を事務的に統轄する特殊細胞にほかならない。

そして機関紙局はなによりもまずその任務の遂行のた

工場党建設のために

党三多摩地区委員会

I 地下労働者行動委員会運動の構築のための党の任務

全同志諸君!!

わがプロレタリア革命戦線は、この三多摩の地において、一方で機械工業の代表ともいべき日産・プリンスにたいして、他方で装置工業の代表ともいべきNECにたいして基本的な攻撃のための配置に着手した。

この両資本は、周知のとおり、その国内の市場における独占的地位と、そして対外競争力に一頭地抜きでた存在としてあるが、これはいうまでもなく、企業の中で合併、あるいはその企業別労働組合にたいする完全な支配等を条件とした合理化の、ほしいままの展開によって保障されたものである。

入社早々、徹底的に労働者の資本秩序にたいする反抗の無意味さをたたきこむ日産、あるいは、これと違う反

置づけられなければならない。

全同志諸君!!

こうした確認にもとづき、われわれは、つぎのような点に当面するわれわれの実践的な課題に焦点をしばらなければならない。

すなわち、われわれのこうした地下行動委員会は、いわばすでにみせかけの民主主義体制の内側にすんでいる機動隊の暴力的秩序のより根源的な形態である、ブルジョア秩序に資本の傭兵としての日産機動隊・ガードマン等の暴力秩序との力関係から規制されたものであるという事実である。

このことは、われわれの闘争が、工場内における合理化攻撃にたいするプロレタリア大衆の公然たる反乱をめざし、工場占拠をめざすものでありながら、まず端緒的には非公然活動から開始しなければならない。

いいかえれば非公然活動に特有の組織的特徴——巾の狭さ、非大衆性、秘密性等々——がもつ制約を、いかに公然化——大衆化するかという問題であり、非公然活動と合法活動との結合の問題である。

この問題は、個別的・地域的に反乱が、それ自体として必然的に支配階級にたいする総反乱へとつきすすむ性格をもっていること、それにもかかわらず、こ

抗分子には、マンツウマン方式で圧迫を加えるNEC資本……これがわれわれの攻撃目標にほかならない。

こうした独占資本の労働者支配は、国際的資本競争の激化・国内経済の不況化にもなつて、このところ一段と激化しつつある。日産工場からは、その独特の季節工は姿を消し、少ない人手で生産増加を実現する合理化が展開され、NECでは通信機部門での減益、電算機自由化を背景に、露骨な低賃金政策がとられている。

実はここにこそ、すなわちそのあくなき合理化攻撃を、まがりなりにも「高賃金」で隠蔽しきれなくなっている現状にこそ、資本支配と、そしてそれに手をかす御用組合の労働者支配のタガのゆるみが見とめられるのである。

こうした事実をふまえて、われわれはまず第一に日産を中心とした、その主な部品工場に勢力を配置しながら、資本・官権・組合官僚一体となった弾圧体制下での地下行動委員会運動に着手した。また第二にNEC工場内に配置される社外工の組織化、その行動委員会共闘の組織化を軸とし、NEC本工労働者と一体となった地下行動委員会運動の組織化、その具体的展開に着手した。

そして自動車戦線におけるNブレーキ行動委員会、電機戦線のNDK行動委員会は、こうした戦略的展望を担う、工場内パルチザンのきわめて重要な根拠地として位

れに持統力をあたえ、これを最終的勝利に導くという困難な壁をのりこえなければならないことを意味する。

以下に、こうした地下行動委員会運動が、その内部において解決しなければならない諸問題について、過去の革命運動の諸経験にもとづき、敷衍しよう。

「革命過程の段階がちがえば、それにつれて各共産党の日常生活にも機能の変化がおこる。しかし根本においては、一方に合法党の目標とせねばならない党構造と、他方に、非合法党の目標とせねばならない党構造とのあいだには、本質上の、ちがいはなにもない。」

「共産主義はどのような情勢のもとでも革命的な準備活動をおこなわねばならず、そしてつねに戦闘態勢になければならない。」

「ふつう資本主義国の合法的共産党は、革命的反乱や武装闘争や、また一般に非合法闘争にたいして党を正しく準備させることが自分の任務であることを十分に理解していない。」……だが「すべての共産党は、地下的活動をよぎなくされた場合にさえできるだけの闘争準備を確保することを理解しなければならぬ。そしてその上すべての非合法的共産党は、合法的労働運動の可能性を

精力的に利用し、集約的な党活動によって広大な革命的大衆の組織者、その真実の指導者に発展しなければならぬ。……」

「合法党、非合法党にかかわらず、一部には、非合法的な共産主義的組織活動というのは、ほかの党活動や党組織から分離した、緊密な、純粋に軍事的な組織をつくりだし、維持することであるというような考えかたがよくある。これはぜんぜんまちがいである。その反対に、革命前の時期には、主として一般的な共産主義的党活動をつうじて、われわれの戦闘組織の建設がおこなわれなければならぬ。全党を革命のための、戦闘組織につくりあげるべきである。革命前にあまり早くから分離した革命的軍事組織をつくりだすと解体と、頹廢の傾向にはなはだおちいりやすい。なぜなら、そうした組織には、直接に必要な党活動が欠けているからである。」

「合法党は、つねに不意うちにならぬ、もつと準備をよくとのえ、処置を講じておかねばならない。(たとえば、擬装のアドレスを安全にまもること、手紙を規則的に破棄すること、必要文書を安全に保管すること、連絡係と秘密活動にたいして訓練することなど)」

「公然たる革命的反乱にあたって……われわれは——まえて編成された軍隊もないのに——大衆の力で、

党の指導のもとに勝利せねばならない。だからしてあらかじめ、このような場合にそなえてわが党を組織的に準備しておくなら、おそらく最も英雄的な闘争さえむなしくおわるだろう。」

「いっぽんに共産党のオルガナイザーは、一人一人の党員、一人一人の革命的労働者をあらかじめ革命時におけるわれわれの戦闘組織の兵士としての将来の歴史的役割においてみるのである。」……

以上の引用は、ローザ・ルクセンブルグの死をまねき、敗北したドイツ革命からの血の教訓をふまえた、コミンテルン第三回大会決議「共産党の組織構成、その活動の方法と内容についての指導原理」中の一文である。

ここには、簡潔ながら、非合法組織のもつべき基本的特徴、非合法活動が要求する要素が見事に描かれている。

(三)

われわれは、労働者地下行動委員会を、このような把握と展望をもつた党のもとに組織しなければならぬ。だが同時に、それはすでにみたように非公然活動を端緒としながらも、非合法とは異なり、より大衆的な労働者行動委員会への発展をめざすものでなければならず、大

衆闘争の前衛として登場することをめざさなければならぬ。

こうした要求を充たすものとして、たとえばローザ・ルクセンブルグは、工場内の秩序の変革をめざすような労働者のストライキ闘争——たとえばわれわれの今日追求している反合理化を基本とする大衆的な反職制闘争の永続的展開を設定した。

そしてわれわれにとつても、プロレタリア反乱の永続的展開——反合理化、反職制闘争にたいする大衆の結集と、こうした大衆の支持のなかえの反乱部隊 行動委員会運動の構築にこそ基本的な展望がある。

だがこのことは、この端初としての地下行動委員会運動に不可欠な、非公然活動の技術の政治的意味を決して小さくするものではない。

以下、こうした技術について、一九三二年ハンガリア共産党の「警察のスパイと挑発者にたいする闘争」を中心にみてみよう。

「非合法的活動はわれわれの組織のきわめて重要な前提であり、その他のすべての諸関係が……これと調和させられねばならない。」(レーニン)

こうした原則にたち、しかも「非合法的活動は革命的プロレタリア党の自己目的ではなくて、革命組織をブル

ジョア国家とその機関から防衛するための武器である。非合法的活動方法は、大衆活動から切りはなされてはならない。」ことを確認し、以下の活動「原則」が揚げられる。

① 非合法的組織の成員は、その組織の事柄を秘密にし、友人にもその他の「信用のおける人」にも話してはならないことは第一の必要である。党の事柄については、本人が委任された活動を遂行する上を知っておかねばならないこと以上には、何人にもだんじて知らせてはならぬ。おしゃべりは党にとって最大の危険の一つである。……好奇心の強いものは、うたがわしい分子として取りあつかわねばならない。

② 非合法的共産党の党員はすべて党名(変名)を使用する義務がある。党活動のいろいろの領域で同時に活動しているものは、領域がちがうごとにちがった名前を使用すべきである。党活動家の「本名」をたずねてはならないし、またその本名で呼んでもならない。

党の一部が逮捕されたときには、逮捕された者またはその関係していた党機関と連絡のあったすべての同志は名前をかえなければならぬ。

③ 非合法的活動は、あらゆる活動——たとえば些少な

のでも——の遂行にあたって極度に厳守することを必要とする。

④ 非法法の住所には他人のアドレスやメモにおいてはならない。活動に必要なアドレス・時間・合図などは暗記していなければならぬ。(その他筆跡に注意道であつてもあいさつするな等)

⑤ 会議、会合場所、あるいは非法法の住居にいくときは……ポケット、尾行に注意……等々……。

以上にもとずき、さらに地下行動委員会運動にとつては、「職場スパイ」——「探偵スパイ」——「興信所」、——「経営者のスパイ」、——「御用組合のスパイ」との闘いや、あるいは、工場・職場内等での活動を制約する障害への対策も要求される。

また、政治警察による逮捕者取調べ——露骨な暴力、若い活動家の未経験さへのつけこみにたいし、「警察の訊問者を相手に『原則』や『世界観』などについては討論をはじめめるものは、誰でもそのことによつてすでに邪道におち入ったこと、裏切りへの第一歩にあることを知らねばならない。党指導部は訊問や獄中および裁判所における革命家の態度についての指針を最も綿密に作成しなければならぬ。」ことが指示される。

これらは、いずれも非法法活動を展開する技術(テク

ニック)としてすぐれた原則であり、われわれの端的な地下労働者行動委員会にとつて欠くことのできぬものである。

四

だが問題はさらに具体化されなければならない。大衆的反乱闘争との結合を中心とした反乱闘争の組織化、そしてその主体としての地下行動委員会の非公然活動、これらをさらに実現するためには、実は、具体的形態をもつた合法的組織……いわば工場内での反乱闘争——バルチザンを闘いぬくための労働者大衆に支持された根拠地を構築しなければならぬ。

これはいままでも展開してきたことからわかるように、プロレタリア大衆の資本家・職制にたいするにくしみの心情のなかにある。そしてそれをたしかなものにすること——これが当面の重大な問題である。

それは、当面、具体的には労働組合、救援会等々……における影響力の増大や、あるいは、こうした公然組織の地域的拠点によつて保障される。だが勿論それにとどまらない。さまざまなスポーツ・クラブ、サークルなどが活用されなければならない。

こうした組織を通じて、

こう

した組織の内であつたわれわれの大衆反乱をめざした地下行動委員会の活動が公然と支持されるならば、それは文句のない「根拠地」となるだろう。

そして、今後の展望にとつて重要な意味をもつ問題ははじめにコミンテルン決議においてみたように大衆闘争、大衆反乱を基本的展望として確信したうえで、当面補助的手段として問われる、党直属の行動委員会——選抜隊の役割である。これは、われわれの闘争の発展につれて、敵との工場内、街頭等での衝突につれて欠くことのできないものとなるだろう。

(多摩通信 第二号 五月五日)

II 党・労働者行動委員会・

労働組合

(一)

全同志諸君

われわれは、多摩通信第一号で、工場占拠・ゼネスト

をめざすべく、三多摩党体制を三つの地区に細分化し、それぞれダイナミックスを内包した、工場・職場に基礎をおく前衛党となることを確認した。これは従来の大地区党体制のもつ弱点——政治的意志統一の弱さ、実践における強力な統一性の弱さの克服をめざす試みにほかならない。

全同志諸君

われわれは、こうした新体制の確立をめざすと同時に、これが工場占拠・ゼネストをめざす、明白な戦略的計画の実践的内容であることを明らかにした。すなわち、「労働者行動委員会」第五号「前衛」第五六号においてみたように、日産、あるいはNIPPONにたいする断固とした攻撃計画の実践体制としての意味である。

日産についていえば、その拠点大工場へのメンバーの配置主要部品工場へのメンバーの配置を実施し、内からの反乱を追求し、さらにNプレキにおける大衆的行動委員会運動を拠点とした反乱の波及による地区行動委員会の形成と、これによる目標工場の包囲という陣形がそれである。

NIPPONについていえば、下請社外工を中心とした下請企業内での闘争を媒介としながら、NEC内社外工行動委員会連合の形成をすすめる、これと本工行動委員会の連合を

はかることによつて、工場闘争を展開するという計画がそれである。

そうしてこうした基準は、もう一つの戦線——自治労においても、八王子において本格的な「職場新聞」の発刊による自治体末端権力にたいする闘いの追求と、その全多摩規模への波及として追求されはじめていのである。

全同志諸君

われわれは、おおむね、こうした計画にもとづいて、直面する階級戦線における、すなわち、日産 NEC におけるように、労働者のあらゆる政治的自主性を圧殺するような体制を基本的な基準においた、行動委員会運動の端初——地下行動委員会運動に要求される組織上の諸問題を提起した。(多摩通信第二号)

そして現在、われわれは労働者大衆行動委員会運動を根拠地として構築し、いくつかの地下行動委員会との結合をはかりながら、われわれが獲得したこうした主体的な条件を、もの見事に運動へと転化することを要求されているのである。

そしてこの場合、まずなによりも第一に、労働者大衆行動委員会の独自の行動を軸にした行動の展開が要求され、これを通して、巨大な革命的任務をもつ労働者行動

委員会を工場・職場——経営——に確立することが任務となる。その具体的内容、方法については、一月会議への基調報告——世界革命第二号巻頭論文、NDK闘争に

則して展開した報告——(前衛第五三三号)——あるいは、前衛第五六号において、ある程度は追求されはじめている。(秘密宣伝活動、秘密サボタージュ、職制秩序麻痺闘争、公然たる大衆サボタージュ、部分的工場占拠闘争、組合官僚・スパイ・白色テロとの闘い等々)

そしてわれわれは、こうした地下行動委員会を主とした戦闘段階が、職場秩序の部分的麻痺をねらいとした心理的戦闘としてあることをみるならば、その内容は、今後とも奥深く創造的に深められうることを確認しなければならぬ。事実NDK闘争においては、いくつかの創意がこらされている。

しかし他面では、こうした心理戦争——すなわちヒット・エンド・ラン戦法は大きく人民戦争・プロレタリアートの階級戦争の一環にほかならない。すなわち、工場占拠・ゼネスト労働者武装による職制・資本家の追放、ブルジョア財産の没収、労働者権力の樹立をめざすプロレタリア総路線の一環としてみがかざあげられなければならない。

そしてこの場合、こうした心理戦争を、大衆的反乱へ

と結合するにあたって決定的な意味をもつものが、革命的根拠地である。この革命根拠地とはなによりもプロレタリア大衆の内部における支持を基本的内容とするが、それは具体的にはつぎのように表現される。すなわち、まず、われわれの戦略目標——大経営にたいする反乱部隊による包囲、この包囲部隊そのものである。NDK、Nブレイキ等、こうした包囲部隊形成の最先端として位置づけられる。このような部隊をいかにして広げていくか、これがとわれる。そして第二には、目標となる巨大工場の内部に、あるいは寮に、スパイ・白色テロ団の追求をくぐりぬけることのできる、労働者大衆組織をつくりださなければならぬ。こうした組織による地下行動委員会の支持・防衛・これはもともと強力な敵の支配下での根拠地構築をいみする。われわれはこのような根拠地を一層具体的な豊富なものとしていかなければならぬ。

全同志諸君

こうした内容は、すでに不充分ながら、われわれがすでに実行しはじめたものにほかならない。あらゆる主体的な手がかりを以上のような戦略的計画にもとづいて、

運動に転化すること、ここにわれわれの任務が集中的に表現されている。

だが、そのためには、われわれの戦線の拡大・闘争の激化にともない必然的に増大する党の指導体制の強化、強力な政治的意志統一に裏づけられた各戦線での行動の質的一致を実現していかなければならない。

しかも、そのためには、このわれわれにとって、まったく当然であると理解される戦略・戦術を、くりかえし工場・職場そこを基礎とした労働者行動委員会を通して豊富化し、確かめなければならない。

たとえば、われわれは、党、労働者行動委員会、労働組合の相互関連について、その具体的な闘争を中心にして、あるいは組織方針を中心にして、実践的視野から、常に明確な把握をしつづけなければならない。

ここに一つの問題を提起しよう。

われわれは一九六八年五月、フランスの闘争を分析するなかから、このプロレタリア工場占拠・ゼネストの革命的権力闘争への発展が、まさにその闘争のつよさでもあった自然発生性のために失敗したことに、最も基本的な教訓の一つを見出した。そしてこうした限界を突破する鍵が、実はすでにこうした闘争の質を示しはじめた六七——六八年における賃闘反合闘争を通しての青年労働

者の自主的バリケード・ストライキへの「左派」の無対応にあったことをみた。

同年秋より展開された、イタリアの底辺委員会運動は、組合から自立した労働者の職場における労働者委員会を主軸にした創意あふれる反乱的闘争への大量の革命的インテリゲンチヤ、学生の結合、その巨大工場フィアット・トリノ工場への波及として、真に注目し価するものであった。

われわれは、こうしたとりくみからは、最大限可能な教訓を引きだしつづけなければならぬ。

だが、真にとわれるのは、ゼネ石、日産京都車体等でみられるような日本における同質の労働者反乱の開始にさいし、わが党自身が、こうしたフランス・イタリアでの試みの革命的意義をふまえ、継承し、さらにさきこれを押しすすめる原動力となることである。

こうした観点から、さきに提起した問題のもつ意味を歴史的教訓を通して確認し、さらに実践的な方針として確認しよう。

この場合、われわれにとつて理論的・実践的に無限の教訓の宝庫となっているのは、一九二〇年代後半から三〇年代はじめにかけてのドイツプロレタリアートの敗北の経験である。

だが、こうした体制がほゞかたまったのは、実は一九二八年、コミンテルン第六回大会を中軸とする「第三期」論によつてであった。

すなわち、いわゆる相対的安定期において、階級攻防戦のひとつの焦点となった、ドーズ案にもとづく産業合理化攻撃のなかで、ドイツ共産党はコミンテルンと同様に右ゆれし、これに対応しきれずに、結果的にロシア革命の衝撃と、ドイツでの革命的激動を通して獲得したプロレタリア勢力を失うことになる。そして「第三期」論は、逆にドイツ恐慌にさきだつて、相対的安定期末期の「突撃指令」として作用したのである。これは一層党の影響力の後退に拍車をかけた。(黨員一九二三年末 二六・七万、二四年末 一八万、二八年末 一三万、三〇年九月 一二万)

問題は、これが一九二九年以降の世界恐慌の爆發、その通貨恐慌としての深化の過程で、つぎのような結果としてあらわれたことである。

すなわち、

一九三〇年十二月、共産党の細胞数 経営で一、五〇

〇、居住で三、五〇〇

一九三二年三月 経営で二、一〇〇 居住で六、六〇

この期間のドイツプロレタリアートの闘いは、一九一八年の革命、一九一年一月闘争の敗北から、レーニンのもと共産主義の影響力の拡大をめざした統一戦線論を前提とし、なお一九二一年三月行動、一九二三年反乱の敗北を重ねた結果、党主体の確立——ボルシェビキ化の確立をめざしたことから始まる。

このボルシェビキ化は、スターリン派のコミンテルン支配の武器とはなつたが、反面、具体的には伝統的な議会選挙を主軸とする地区政党の体質を工場党に基礎をおく組織に再編し、プロレタリアートのヘゲモニーを確立することをねらつたものであった。(共産党のボルシェビキ化にかんするテーゼEKKI一九二五年三—四月)

こうした主体をもつて、激動期にブルジョア支配の支柱となり下つた社会民主党に主要攻撃をむけつつ、労働組合内における左翼反対派を形成し、こうした体制をもつてする闘いを通して党のもと、具体的には赤色労働組合に大衆を獲得すること、これがこの時期の「統一戦線」戦術となつた。しかも注目しなければならぬのは、この赤色労働組合は、きわめて矛盾にみちたことであるが、実質的には明確に権力闘争の担い手として、革命的労働者行動委員会の性格をもつものとして位置づけられていることである。

一九三〇年 一、五〇〇経営細胞中六〇〇は五〇〇人以上従業員の企業、一九三二年までの新たな経営細胞は大部分は中小企業。

くわえて、ドイツ労働組合総連合による共産主義者の除名……といった事実である。(上杉重二郎 ドイツ革命運動史 下)

この事実、コミンテルン・ドイツ共産党をして恐慌下でつぎのような方針をとらせた。

すなわち、一九二六・七年の反合闘争をつぐものとして、

「失業者反対闘争は、すべての革命的組合全革命的労働組合反対派の、さらに労働者階級の陣営内にて闘争能力と活動力あるすべてのものの注意の中心点にたたねばならぬ。失業者の問題は全労働者階級の問題である。」

そしてこれとの関連で、「あらゆる経済政治闘争、街頭占領のための闘争、戒厳状態にたいする闘争」等々が位置づけられた。そしてこうした闘争の方法がみろがきあげられた。失業者こそ「最大の革命勢力」とされた。(「失業と失業にたいする闘争」戦旗社)

一九三三年ペーベン政府の攻撃、ヒトラー登場の前夜の社会民主党のサボタージュにたいして組織された九月ストライキは、こうした事実を正確に反映した。すな

わちストライキ労働者の六〇%小企業、三〇%中企業、一〇%大企業というのがそれである。(上杉 前掲書)

これに対し、注目すべきはナチスの方法である。すなわちナチスは国民社会主義経営組織(NSBO)を経営における突撃隊と位置づけ、国民協同隊への過渡として労働総同盟等全労働組織への加入戦術をとり、労働組合の「革命的接収」をめざすという方針をとったことである。しかもNSBOは自己を政治組織として自立化し、内部で政治闘争を追求し、またその個々の経営細胞の自由を保障し、その多発性をうながした。赤色テロ粉砕をスロイガンとするナチステロがその行動形態であった。共産党が追放された組合組織の中に、あるときは、経済ストライキ闘争を展開し、資本の不信をまねきながらも、ナチスは部隊をつくりあげた。(ドイツ労働の指導戦線 アルバイタアトウム)

もとよりわれわれはコミンテルン・プロフィンテルを通じてなされた赤色労働組合主義の論理的矛盾を容易に指摘できる。あるいは「社会ファシズム」論をもって社会民主党指導部のみでなく、大衆自体との敵対を広げた誤まりも重大である。これらはその赤色統一戦線――

ゼネストの自然発生的爆発が必然的であるものとして、予定するわけにはいかないという意味である。)

注 こうした観点をもたず三〇年闘争を社共の議会的影響力からとらえかえし、統一戦線さえあればと展開するのが今日の「公認共産主義」運動の論調である。

全同志諸君

日

資本主義的合理化攻撃との闘いを通してみがかきあげたプロフィンテルンのストライキ戦術(一九二九年一月ストラスブルク会議の決議)には、その闘争の技術としてみるならば、ロックアウトにたいする闘争方法、闘争機関について、指導について、ストライキ指導部と改良主義的労働組合機構とのあいだの関係について、統一戦線、ピケと自衛団等々、実に豊富な内容が含まれている。ストライキ戦術の是非はともかくとしてその闘争技術にかんするかぎり、わが地下労働者行動委員会は、こうした点をさらに吸収しなければならぬだろう。

しかし問題は、われわれにとって、労働者行動委員会の基本的な自立化――巨きな戦略目標のもとでのこの組織の確立を第一の任務として確認しながら、しかしあく

はざとり戦術を決定的に破産させる主要因であった。

だが「社会ファシズム」論を批判するトロツキーにしてからが、労働組合の自立、労働者民主主義を武器として、挺子として揚げながらも「労働組合がその行動においてプロレタリア革命の機関であることを意識するべきか」というとき、問題が、こうした戦略的次元に限定されるわけにはいかないのである。(トロツキー「帝国主義衰退期における労働組合」)

そもそも三〇年代危機にあつて、民主主義の擁護者として無能をさらけだす社会民主党、戦わず敗北したドイツ共産党にたいし、工場占拠・ゼネストを対置するとき、このようなスロイガンを実行すべき主体的形成は、実は一九二〇年代後半の合理化闘争、これをめぐる組織戦術のなかにとわれていた……これこそが三〇年代闘争のきわめて実践的な教訓の一つである。そしてそうした力学は六八年のフランスの五月革命にも該当するのであり、あるいは一九三六年の場合をも考えるなら、こうした自然発生的な工場占拠・ゼネストが勃発したこと自体がドイツの場合と対比するならば、その自然発生的性のつよさにみられるように、フランス階級闘争の特殊性をあらわしているといえるのである。(ということは工場占拠・

までもその展望を、工場の中に、経営の中に見出すというところにあるのだ。プロフィンテルンの左翼統一戦線戦術はざとり戦術、その武器としてのストライキ戦術はこの点で明らかに破産した。今日の新組合、少数派組合戦術は情勢におされて、こうした破産した戦術の復活を試みるものにほかならない。

これにたいしてわれわれは、労働者行動委員会を主軸とする工場内のパルチザンの闘争を蓄積しながら、その勢力をナチスにならない、経営のまた組合の内側に形成しなければならぬ。まさにこうした闘いによって、われわれの目標の実現の部隊としての労働者行動委員会を組合にかわるものとして、準備し、形成しなければならぬ。組合主義者との闘い、組合の解体とは、このようなものとして、革命にむけて準備されなければならない。その実現は、こうした準備と結合し、大衆自身の手で行われるだろう。

わが労働戦線の当面の環である資本主義的合理化を粉碎し、職制秩序を粉砕する闘いは、現状では以上のような展望への過渡として、行動委員会を主軸とする労働組合に結集した活動家大衆、あるいは、その他さまざまな労働者のグループをの統一戦線の具体的形態は、企業の規模、形態あるいはその内部における労働組合組織の状

態、組織化の状態等々によって当然さまざまである。

全同志諸君

われわれは、くりかえし確認してきたように、まさに現在来たるべき危機の前段階にある。そしてこれにたいし、プロレタリアートの工場占拠・セネストをもつてのぞもうとしている。

全同志諸君

このようなわれわれの目標を実現するためには、是非とも必らずわれわれ自身が現在必死で追求している新たな党体制を確立しなければならぬ。全党員・全細胞が階級戦線の最尖端として自覚し、自らの手で戦線をひろげなければ、NECにたいする、日産にたいする全ブルジョアジーにたいするわれわれの挑戦・プロレタリアート総反乱は空語と化すだろう。逆に全党員、全党細胞が創意と、献身にみちた活動を追求し、もてるすべての力を発揮するならば、いかなる困難をものりこえることができるだろう。

全同志諸君、巨大工場における、あるいは部品工場、下請工場における労働者反乱―工場バルチザンに着手しよう。巨大工場の内部でのバルチザンに呼応し、これを巨大な大衆反乱へと転化するために、全力をあげて包囲体制を構築しよう。包囲部隊を革命根拠地として全力を

あげて拡大しよう。わが総路線の戦略部隊として、すべての戦線で党のもと労働者行動委員会を確立しよう。労働者行動委員会を主軸とする革命的統一戦線を工場・職場に構築しよう。来たるべき革命的危機にそなえ、全力をあげて、真の革命的前衛―党を工場・職場に確立しよう。

(多摩通信 第三号 六月六日)

Ⅲ 党工作者と党建設

はじめに

谷川雁は、その論文「工作者の論理」において、「工作者」についてつぎのように語った。

すなわち「思想が非思想(……実践とよめ)の領域に溶けこむあたりをうまくピンでおさえて比較分類を」するような方法が結局あれも、これもということになり、工作者をとらえることができないう指摘し、いう。

「……工作とは伝達の可達の可能を信じてことです。

そのゆえに伝達の困難を知りつくすことです。この意味で工作は避けることのできない誤解に沿って進んでゆきます。工作者はつねにその誤差が目的にとって許容範囲内のものであるかどうかを測定します。それがまた論理の浸透しうる限度でもあります。」

「工作者という桶は一つ一つ例証をもった逆説と比喩でいっぱいになっていきます。その共有部分を確認しようとする二人は、きつと千一夜もしゃべりつづければならないでしょう。私たちはときたまの会議でこの桶をくつがえそうと試みます。しかし時間が足りないのです、すぐあきらめてしまいます。そして論理の前提部分ほとんど整合されず、各人のイメージはなんらの侵蝕を受けあわないままに結論を出します。その有効範囲があまりに広いので反対しようもないといった結論を。このような結論によって動く現実の質的な深さというものがどの程度のものであるか、実践しないうちからおよそ見当がつく、その空しさに対する怒りのようなものが今日の工作の動力になっているといえないでしょうか。」

「……不断にあらゆる時点で時間がたらないのです。あるいみでそれが私達の光栄なのです。だから私達の間ではレーニンが月に何冊の雑誌をよみ、毛沢東が日に何種の新聞をよんだかというような問題になれば、議論と

哄笑が常にいきいきとよみがえります。なぜなら、私たちは論理が肉化するまで待たなければ、なにひとつ醗酵しないことを知っているからです。つまり醗酵促進の方法がみつかっていません。」

谷川は、こうした自分を「正の工作者」と呼び、「これにたいしてみずからをひたすら行為の陰極に置くことで私を動かしている相手……を負の工作者と名づける」。その工作場は、村から工場へと移り、つぎのような、工作の道が展望される。

「密着と空隙が同義語であるような、そういう新しい関係を工場と村(巨大工場と中小工場とよめ)に見出しえない者たちの戦略論争……それでは私などには革命という言葉さえほとんどほんのイメージもあたえてくれないうのです。」

小工場での権力と資本の圧力に耐ええたいろいろなサークルの経験、そして巨大工場でなぜそれができないのかという話しあい、小工場のグループへの大工場の労働者の参加、大工場地帯への進出……

「密着しようとすることがすまを発見する唯一の道です。どうやらぶつかることのできるくらい距離にすら人間同志はまだ存在していないと考えないで何をいいたい組織するのです。そのような姿勢でうまれた組織に

よって何をつくるのです。こわしてすきまをつくるのではなくて、すきまはすでにあります。発見することが大切なのです。」

「労働者階級の欠陥……すくなくとも私の眼にうつる最大の空しさは、労働者階級がすべてを全身で要求していない、……誤りにみちた方法で震える一匹にたいして、これを真に攻撃するものがない、つまり組織するものがないのです。この責任の一半は私と同じくあなたにもあることをお忘れなく。」

そして統一は、「組織人の非組織性と非組織人の組織性との葛藤としてとらえることです。……」そこから現代のファシズムをはじめ、もろもろの蛇やなめくじが発生する巾をもった地帯」ここを捨象しては……「理論信仰と実感信仰との二つの大洋を同時に漂流し……」ついにそれは認識論に終って世界観には到達しないのです。」

「このようにして私の工作者は……論理で語ることでできないものを語ろうと決意し、ついには新しい論理を切り開く人間です。……それが今日いかに奇妙な谷間に窺せしめられていようと、私はまずあなたをそこへひきずりこもうとすることで、普遍性を獲得しようとかかります。」

これをいにかえるならば、NDKの闘争を通じ、彼は大衆の獲得、大衆闘争の組織化、を追求しながら、大衆のなかにつきすすむ方法をついにみつけどし、自分のものとしたといきつてもいいだろう。なぜなら、「大衆とは一人、また一人なのだ」というこの徹底的に現実をみつめた言葉は、決してNEC八千の労働者をまえにし、絶望的な無力感を吐露しているのではなく、八千人の労働者の闘いを組織する現実の方法として、八千人の重みをもつ一人、一人として語られているからだ。このような言葉をみつけどしたこの同志は、こう語ることによって、自分自身を大衆反乱の組織者として、そうした反乱部隊の組織者として、大衆のなかに見出した。

それだけではない。実はこうした工場闘争を通じて、ずしりとその重さを感じることでできるようなものとしてわれわれが共通して獲得した組織上の教訓は、もともとと数多く、豊富なものなのだ。そのいくつかをとりだしてみよう。

たとえば、行動委員会運動の形成を通してその前衛部分を党員として獲得する問題がおこった。ではなにが行動委員会運動から、党員への飛躍の決定的基準になるのか。闘いの最前線にいる同志が要求した決定的な基準はひとえに、闘争行動における、組織活動における「自

(注)……()内は筆者

六〇年安保闘争をまえにしたの、この谷川の「工作宣言」は、ほんの少し戦略的位相を現状にあわせることで、きわめて生々とした工作者の論理と心理をえがきだしている。これは決して無視することのできない、それどころか、われわれ自身と重なりあっているとさえいえるものである。

だが反面、谷川がその全力を投入した大正行動隊が、三池闘争を頂点とする炭鉱合理化の嵐のなかで、敗北・解体へとすすまざるをえなかったこと、これは、こうした「工作宣言」の確認だけでは——それが絶対に必要な段階だとしても——決定的に不十分であることを示しているといわなければならない。

六月某日、工場占拠・武装蜂起をめざすわが党・三多摩地区における党会議で、一同志は、まことに賞讃にたいする発言をした。

「おれにとつて大衆とは、全NEC八千の労働者でもなければ、ニッサンの全労働者でもない。大衆とは、NECでの闘いを組織するために獲得しなければならぬ一人、また一人なのだ」と。

発性であった。その姿勢に、上からの指示をうけてからやろうとする消極性をもつものは党員としての資格にあたいしない、こうした原則を党は確認した。

これは、さらに党員の革命家としての自覚、その質的向上への自発性としても理解されなければならないだろう。こうした自発性は、結局権力の弾圧にたいする不屈性、権力への警戒心をもたかめるだろう。

さらに、NDK行動委員会を通しての、その組織規律として獲得された「水平主義」——一人一人が闘争主体となるための自発的訓練から出発して、戦闘集団の維持のための労働——生活共同体の創出の経験をあげなければならない。これは「貧困の平等」「塹壕の社会主義」と同様、行動委員会のメンバー一人一人の共産主義意識をたかめ、ひいてはわが党そのものにこうした規律をきびしく要求するものとなっている。自動車戦線での、工場工作者集団の目的意識的な戦闘共同体の創出は、こうした経験の適用にほかならない。

階級闘争における裏切り、脱落分子にたいするきびしい態度もまた重要な組織原則である。具体的には、こうした分子にたいしては追放・制裁以外にないが、しかし行動委員会における、こうした原則の適用において一人一人に要求されるきびしさは、同時に党の構成メンバー

においても、その姿勢を不断に正す基準とならざるをえない。

そしてさいごに、現在の時点では、不断の闘争を通じて戦士——党員に要求される、階級情勢の分析能力の充実、それを保障する学習活動の重要性についての自覚について確認しなければならぬ。そしてこれらすべてが、同志の信頼をたかめていくのだ。

(二)

では、こうした党工作者集団に要求される組織原則、しかも実践の場を通じて、一つ一つ経験的に獲得された原則は、われわれの党建設の路線に照らしてみると、どのような意味があるのか。

それはわれわれの党組織問題の中心が、ひとえに党建設——党組織化のできるかぎり急速な遂行にこそあるという点で決定的な意味があるのだ。

工場反乱——工場占拠——武装蜂起、工場をこそ主戦場として構築される労働者権力、工場における二重権力を動力とした地域、全国の二重権力、さらにこれを原動力とした労働者国家の樹立、これが世界革命戦略におけるわれわれの立脚点である。そしてこのような基本的任務は、工場反乱、工場占拠を担いうる労働者行動委員会

によって、はじめて具体的なものとなりうる。工場、地域におけるわれわれの党工作者集団としての自己確認、さらには具体的な闘争を通しての諸経験としての組織原則の確認は、いわばこうした戦略部隊建設にたいする、もっとも確かな、現実的な解答であり、保障なのである。

われわれは、工場反乱を追求しながら、なによりもまずその意識的、行動的の中核としての党工場細胞の建設を、こうした戦闘を通じ、日常的に獲得してきた組織原則に依拠しながら、なにがなんやりとげなければならぬ。これにわれわれのすべてをかけていかななくてはならない。われわれにとっての「組織問題」とは、このような意味をもっている。

わが党は、七〇年安保闘争の渦中で、本格的な権力闘争の時代の到来を確認し、これに耐えうる前衛党の建設を目標として設定し、これの実現に全力をあげてきた。

それはもっとも中心的には、七〇年闘争そのものへの革命的介入を通して、すなわち学園占拠闘争と、これを出撃拠点とする駅・街頭連続占拠闘争として構想され、追求された。この闘いは、「都市・学園にたいする機動隊ロックアウト体制」との闘いとして継承され、今日、この体制側の攻撃をまえに、右から左へと分解した「全共

闘」運動——実は反政府実力闘争派との、「権力闘争」派としての党派闘争となっている。

こうした闘争は主として学生戦線によって担われてきたものであった。だが他方この「権力闘争」の工場での構築もまた多くの試練にたえながら追求されてきた。それは神田合同労組、R自動車での闘争、S化工闘争、全通O闘争を経て、NDKでの闘争に至る工場・職場での闘いである。

学園占拠闘争が、その徹底的な闘いのなかから、工場占拠・プロレタリア総反乱の一環としての学生革命として自らを位置づけ、労学底辺委員会運動を推進する一翼を生みだしたこと、これにたいしわが労働戦線が、一路工場反乱・工場占拠をめざし、その端初的な工場反乱の組織化にとりくんできたこと、ここにわが党の党建設の現実的基盤がある。いいかえれば、党は自己の建設の基盤を、このように獲得してきた。

そして今とわれているのはこうした基盤の上になつて党建設を一層目的意識的なものとして遂行すること、レニンが経験したように、自然発生的・手工業的党建設の段階から、全国的、計画的な水準へと引きあげることである。

とはいえ、わが党の党建設へのとりくみにおいて、自

然発生的・手工業的次元を突破する試みがなかったわけではない。共産党革命綱領草案へのとりくみ、あるいは今年一月会議の主要議題となった党組織論の深化をめざしての論争等々、われわれは党理論の確立をめざして努力してきた。

とくにブルジョア組織の特徴——民主主義的原則と官僚制——と対比しての、プロレタリア共産主義組織の諸特徴——全共闘的組織——の解明は、つぎのような積極的意義をもつものであった。すなわち第一に党組織論自体、第二インターの諸党やスターリン主義党組織の二の舞をふむものであつてはならないこと、第二にさきにもたようなわれわれの闘争を通じての組織的経験を理論的に裏づけるものであること、第三に、不断の党革命による党の革命性を擁護するものであること等であり、われわれの党組織論は、これらに見事にこたえるものであつた。

だがしいて問題を提起するならば、建設されるべき党組織の原則と、そして現実のブルジョア社会からうける党員——党組織への影響との矛盾を原動力とする党の矛盾論——発展論は、実は、現実の党建設の過程、現実の革命の発展過程と一体化されなければならない。冒頭に長文をもって引用したような「工作者の論理」が反発し、

一人歩きするような弱点を内包するものであってはならない。党の理論は、この意味で百パーセント実践の理論でなければならず、今のわが党の発展段階からすれば、党一行動委員会を通してあらわれる戦略主体の不断の確定ぬきには、あらゆる意味で「権力闘争」自体がありえないことを確認しなければならぬ。「党の理論」は実践にひきよせられなければならない、つねにわれわれ自身を語るものとならなければならない。

われわれは、革命への忠誠と献身を全身に充滿したポリシェビキ派のなかにあって、レーニンがその革命的結束をかためるために、一九〇三年ロシア社会民主労働党第三回大会以降どれだけの努力をはらったかを、たとえば「なにをなすべきか」をふまえた「一歩前進、二歩後退」の長文のなかにもみることが出来る。当時の宿敵トロツキーをして、レーニンの組織論は、労働者・党員にたいする不信の体系であるとまでいわせたレーニンの緻密性とその迫力は、実は「革命の健康」と、そしてポリシェビキ派党員の意識のさまざまな水準を現実的前提としたこれら党員の党への結束とを同時に実現しようとする説得するところから生れてきたのだ。それでなければ、一方で「革命の健康」こそ党運営の最高原則であるといひ革命派による党運営における独裁を擁護しながら、しかし

圧倒的な努力を組織運営における民主主義的手続の正当性の証明にたいやすというレーニンの方法を理解できない。

いかえれば、それは革命の蜂起をめざす党の建設、その現実の過程そのものの反映にほかならない。この場合多少の理論的矛盾、混乱は問題とならない。あるいは二次的な問題である。

(一)

わが党・三多摩地区委員会は、つぎのように三つの戦線にわたる戦略的計画と、それに応じた党建設の計画を確定してきた。

第一はNDKの闘争を挺子とした、NEC系下請企業における行動委員会の建設と、そしてこれによるNECを目標とする工場闘争の追求である。国際規模での電子計算機業界の競争の激化の展望と、そして一段と強化されている資本主義的合理化による資本攻撃、これはこうした任務の客観的条件の成熟を示している。

そして問題は、全面的な危機——労働者総反乱を展望しながらも、すでに部分的にきびしい階級攻防戦に入っているNDKをはじめとするわれわれの戦線が、どのようにしてこうした戦略的展望に照準を定めながら、その

敵階級との緊張関係をためこむことができるかという点にある。この困難な任務は、一方でわれわれの闘いが、常に敵によりわれわれの計画を上まわる速度で強いられる「決戦」にそなえることを要求し、他方でわが部隊をしたたかな組織部隊として強化構築することの必要を意味する。NDKの行動委員会メンバーによれば、現局面においては、行動委員会の一人一人に権力闘争の目的意識的な自覚を要求しているのだ。

党は、まさにこうした要求にこたえるものとして、文字通り行動委員会の前衛となることを要求されている。同時に党は、こうした困難について労働者行動委員会に結集するメンバーにたいし、なによりも革命的労働者にとつて、もっとも信頼にたいたいする組織となり切ることとに全力をつくすことを要求されている。われわれの闘いは、少なくとも現局面においては、こうした前衛的労働者に、はかりしれない英雄主義、決意、そしてきびしい生活態度を要求し、さらに敵権力の弾圧の砲火に身をさらすという高価な犠牲を要求する。そうした状況のなかに労働者を導き、さらにこの労働者の信頼にこたえる道、それこそ党の確乎たる確信であり、それを具体的に示す綱領、そして党組織自体なのだ。

われわれは、こうした前衛的な労働者の要求にこたえ

るには、まだあまりにも貧困な経験とそして教育の方法しかもっていない。労働者の学習への意欲をたすけるための労働者学校や、適切なパンフ、またなによりも党機関紙誌活動がそのための武器として生かされなければならない。

第二にわれわれは、自動車戦線にたいし、党の戦略的計画にもとずき、全力をあげてとりくんできた。巨大な組立工場とその部品機械製造工場を中心とする膨大な金属・機械工業の群、われわれはこうした全体系に、党工作者の配置を追求し、そうしたなかで生産組織自体の調査研究にとりくみ、労働者の工場反乱の条件を追求してきた。われわれは、切れぬない反乱の契機を、資本による無限の能率アップ・ベルトコンベアのスピードアップに見出し、同時にこれを資本主義的に制圧するための敵の武器——職制体制に集約される軍隊的秩序、暴力団官権、そして会社組合ともいべき自動車労連、部品労連、等を位置づけることに成功した。いまや労働者自身の反乱の思想、いかえればNDKの場合と同様、前衛的労働者を獲得・結集しうる「綱領」が要求されている。同時にあらゆる反乱的行動が、一直線に「決戦」へと急展開するような状況での戦闘の方法が、基本的に要求されているのだ。

そして第三に、こうした電機・自動車にくわえて見落せないのは、いわゆる中小企業労働戦線（非独占企業、非系列企業としての）における部隊構築、さらには依然として民同的支配が持続している公労協、国公・地公等の巨大な戦線での戦略部隊の構築である。

市職戦線における、あるいは合同労組におけるわれわれのとりくみ（NDKは当初その一環として出発し、Nプレーキもそうである）は、いわば民間重工業を中心とする工場占拠闘争を、より全地域的なものとして深化させながら、しかもこれを全国化する（企業一単産型、あるいは自治体のように同質の問題の内包するものとして）二重の意味がある。

だが、ここでも欠くことのできない要因は、われわれの戦略部隊の構築のためにとわれる問題が、さきの二つのケースとなら異なることの確認である。民同体制の持続は一面労働者民主主義の存在を示すかのようなものがあるが、その範囲はきわめてかぎられている。たとえば国家の末端権力を構成する自治体をみれば、それは吏員制度を土台とする身分的、官僚的の制度によってなりたっており、高級官僚、職制（吏員）、現業労働者を内包している。

労働組合とそれが保障する民主主義はこうした制度と

場反乱・工場細胞の建設という、すべてを共通する質をふまえた、全国的な労働者権力の樹立について構想しなければならぬ。

金融ブルジョアジー、中小ブルジョアジー、農民、そしてプロレタリアートの基本的動向、そして全国的な階級対立の基本的な内容の不断の分析、さらにこれらを不断に世界階級闘争の一環として把握し位置づけること、こうした分析にもとずいて、党は工場反乱をめざす前衛的労働者に、具体的な政治的任務を明らかにし、全国的な労働者権力の樹立の展望のなかで、現時点での闘いの位置、を示さなければならぬ。しかも他方でこうした闘争への結集を、決起を全国の革命的労働者に呼びかけこれを確かなものへと組織化しなければならぬのである。

こうした追求なしには、われわれの全勢力は、「部分的蜂起」における敗北という歴史的運命に陥る危険をまぬがれることはできないのである。トロツキーが三〇年代ドイツ危機において、「量が質を決定する」と苦痛にみちた発言をしているのは、決して小さな問題ではない。われわれは、機関紙誌体制の革命的再編による全国党工場建設の諸計画に、全力をあげてとりくむであろう。

一体化しながら存在しているにすぎない。労働者行動委員会には、いわば権力の末端にありながら、しかし兵士Ⅱ職場労働者としての質と一体化する以外に基本的展望を見出しえない。そしてわれわれの同志はそうした任務に着手している。

四

こうしてわれわれは、党の総路線にもとずき、具体的な党建設に着手し、そこからいくつかの基本的目標を引きだし、その実現に全力をあげている。

だがすでにみたように、こうした任務はさらに大きな原則——全国党の組織化に従属しなければならぬ。個別的・地域的、そして首都圏での工場占拠闘争の追求は、より大きく全国党、そして世界党としての共産党建設の構想およびその追求ともになければならぬ。

この場合、われわれはすべてを現実の下からの、工場からの道、方法に還元することはできない。全国に「最前線」をつくりだすための独自の方法が計画されなければならぬ。機関紙誌とその全国的配布組織網をつくりあげることは、そのもつとも基本的な方法の一つにほかならない。

と同時に、さらにわれわれは、個別・地域における工

レーニン組織論の現代的意義

樋村 乃介

一、はつと

「口先きの前衛から実践の党へ」を相言葉に遂行された第一次党内革命以降一年、そして工場占拠闘争の陣型構築を目指し、工場党としての確立という任務を相互に確認し合った一月党員協議会から既に七ヶ月を経過している。

しかしながら、極く一部の例外を除く組織の圧倒的多数は、こうした転換を成し切っていない。八月十六日のニクソン演説は、既に危機局面に突入している戦後世界体制が今や号音をたてて崩壊を遂げる段階に達した事実を誰の目にも明らかにした。階級闘争は、加速度的に先鋭化の慶合を深め、革命をめぐる両階級の衝突は、日感らずして訪れるであろう。プロレタリア権力闘争を指導し、組織する前衛党の確立のためには何が問われているのか。我々は何から開始しなければならぬのか。この問題に対する回答は、もはや一刻の猶予も与えられずにその提出を迫られている。

レーニン組織論の眞の革命性はどこにあり、ロシア共産党の前衛党としての限界は、何に起因するのかが中軸に据えながら、我々の教訓とすべき諸点を明らかにすることが以下の行論の主眼である。

二、確固たる党指導部の形成

ロシア社会民主労働党第二回大会の「最大の任務は」レーニンによれば、「『イスクラ』によって提出されねりあげられた原則と組織とを基礎にしてほんとうの党をつくることにあった。」（一歩前進二歩後退）「こうした結果は闘争なしには達成できなかった。」（同）何故なら、当時のロシアにあつては同じくマルクス主義を標榜しつつもイスクラとはその主張を異にし、対立関係にある種々の日和見主義分派が地方に割拠していたからである。「こういう条件のもとでは大会は、イスクラ的方の勝利をめざす闘争の舞台にならざるをえなかった。」こうした党内闘争は、ロシア社会民主労働党をボルシェビキと反ボルシェビキとの分裂に導いた。その分裂の原因は、「主として、綱領の問題ではなくて組織上の問題」

（同）であつた。「綱領問題と戦術の問題とにおける統一は、党を統合し、党活動を集中するのに必要な条件ではあるが、まだそれだけでは不十分である。」「そのためには、さらに組織の統一が必要である。」（同）というレーニンの主張は、統一一般の強調が主眼とされたのではなく、組織問題の重要性の強調であり、「組織の健康」のためには分裂も辞さないという決意が背後に秘められていたのである。

従つて、組織の統一をそれ自体として目的化することは、レーニンには許されなかつた。「われわれは、統一の理念がわれわれの首に輪なわを結びつけるのを許さない。われわれは、いかなる条件のもとでもメンシェビキがわれわれを綱で引っぱるのを許さないであろう。」（調停主義者に対するレーニンの反論）何故なら、階級闘争が要求しているのは、革命的な内容をもって組織された強固な前衛党であり、そうした党を組織し、指導する確固たる指導部のもとでの統一であつたからである。「われわれが党大会にあつたのは、とりわけだれに『指導部』をゆだねるかという問題を審議し、決定するためだつた（一歩前進、二歩後退）」

だからこそ、ボルシェビキの闘争を「影響力をめぐる闘争」と非難したマルトフに対し、レーニンは、「私的な

グループとしての『イスクラ』の活動はすべて、これまでは、影響力をめざす闘争であつたが、いまでは、すでもっと大きなことが、すなわち影響力をめざす闘争だけでなく、この影響力を組織的に確認することが問題になつてゐる。」

「もし、われわれの全活動、われわれの全努力の完成が、いままでどおりの影響力をめざす闘争で、影響力の完全なる獲得と確立でないなら、一体この活動と努力はなんのためだつたのか？」（大会での演説）と公然と切り返すことを躊躇しなかつたのである。

確固たる指導部の下に統一された党活動こそ、レーニン組織論の第一原則であり、レーニンの党内闘争の方法も「影響力をめざす」段階と「獲得した影響力を確立し、完成させ、それを行使する」段階とは異つたものとなることは当然であつた。レーニンは、党中央部の人的構成をめぐつてボルシェビキが多数を制した場合には多数派の権威や中央集権主義を強調し、自派が少数派に転落した場合には「少数派の権利を保護するように大会にうつつたえはじめ」（一歩前進二歩後退）るといふ一見矛盾した行動——二つの相反する原則の使い分け——をとつている。これを単なるマヌーバーと評するのは、あまりに皮相な見解である。レーニンにとって組織の統一や中

中央集権制も先の第一原則の貫徹を保証する場合にのみ意味をもちうる副次的な原則にすぎなかつたのである。もつともそれは、真に革命的な部隊が指導部を確保した場合には、その指導の徹底と継承性を支える有効な武器として重要な意義を与えられるのではあるが。

三、確固たる指導部による

「上からの」党建設

レーニン流の党組織は、「一枚岩の党」としてしばしば表現されている。けれどもそれは、党が互いに等質な党员によって構成されていることを意味するものではない。レーニンにあつてもこの事実が明白そのものであつた。規約の存在は、「日和見主義が党へ侵入してくるのをふせぐとて」(ブレハノフの第二回大会での発言)としての意味を持つと同時に「部分に対する全体の、おくれた部分に対する前衛部隊の『組織された不信』」(一歩前進二歩後退)でもあつた。「資本主義のもとで、いつかは、階級全体があるいはほとんど階級全体が、その前衛部隊の、その社会民主党の自覚と積極性にまでたかまることができると考えるのは、マニロフ根性であり、

『追隨主義』である」(同)という指摘は、当然にも前衛党の内部にまでその適用を及ぼさるべきであつた。「わが党は、革命家の組織の位階制でなければならぬだけなく、多数の労働者も組織の位階性でなければならぬ……」(同)

この意味するところは、単なる党内における前衛、後衛の区別や不均質の発生の必然性一般につきるものではない。党内における指導、被指導の關係の発生の必然性であり、更には、これが具体的には党指導部と一般党员との關係として現われるということの必然性である。W・ハイネの「党の地方機関が党生活のみに手であることを、原則的にみとめる必要がある」(大会での演説)という主張は、党生活を地区の活動に分解させ、単なるその集合に還元するという誤りを犯していた。だからこそ、メンシェビキのトロツキーにすら「党が単一なものであるかぎり、地方委員会にたいする党の統制は確保しなければならぬことを意味している。」「われわれの規約は、「党のすべての部分にたいする組織された不信、すなわち、すべての地方的・地区的・全国的その他の諸組織にたいする統制である。」(大会での演説)として批判されねばならなかつた。

トロツキーの主張は、「上から出発して、部分にたい

する中央部の権利と全權の拡張を」(一歩前進二歩後退)目指すといういわゆる上からの党建設路線を意味する。

「委員会を組織する権利は、わが党規約の第六条によつて、ほかならぬ中央委員会にはつきりとあたえられている。規約は委員会の自治の限界をきめていながら、この限界をきめる際の決定権は、党の中央機関がもっているもので、党の地方機関がもっているのではない。これはイロへである。」(同)まさに、イロハなのである。

前衛党が天から降つたり、地からわいたりするものではない以上、党建設は、「共産主義綱領」を獲得し、独自の党建設という任務を認識、決意したものがまず中央委員会を組織し、その中央委員会が地区その他の委員会や党の機關を組織し、地区委員会をして学園や職場の細胞を組織させるのでなくしては、何からも始めようがない。この逆の過程による党建設は、現実には存在しえないし、取上げてそれを主張しようとする立場は、それが党指導部によつてなされるならば、党指導部としての責任放棄であり、地区委員会や細胞によつてなされる場合には、地方主義、サークル主義といわざるをえない。

このことはまた、前衛党における指導部の交代は、それが民主的方法によるものであれ、下級の叛乱によるものであれ、その党の前衛継承性の喪失、前衛党としての

死を意味するという事実をも示している。確固たる綱領と組織論に基づいて党を組織した筈の指導部がその任に耐えないことを暴露するということは、党の指導部のみならず、それによつて代表されていた党の内容そのものの不充分性をも暴露するからである。一度、指導部としての地位にいたものが安易にその座を明渡すことは許されないし、その恐れがないように指導部は、強固に組織されなければならぬ。確固たる指導部による党指導の一貫性と正当性がその党による階級闘争の指導の内容でなければならぬ。

しかしながら、これは、被指導者としての一般党员の地位を固定化するものではない。指導部は、一般党员を訓練、教育して高め、新たな党指導部をつくりだし、党指導体制の強化に意を注がねばならないことは自明である。けれども、党指導部の強化と拡大は、一般党员の増大即ち、党の拡大を意味するものであり、その意味では、党指導部と一般党员の關係は、拡大されてはいるが、指導・被指導關係として存続するのである。この事実を否定するものは、まさに、マニロフ根性に侵されて

確固たる指導部の存在とそのままて戦略、戦術を實踐

的に適用し、駆使しうる一般黨員の存在、両者の緊密な結合こそ、レーニンから学ぶべき党の姿である。

四、綱領と党の統一性と継承性

レーニン組織論のかなめは、以上見た通りである。しかしながら、ロシア社会民主労働党からロシア共産党に至る過程にあってもそれ以降でも、ロシア前衛党が一枚岩の統一性を体現したことは一度もなかった。皮肉なことに、スターリンによってロシア共産党の革命的伝統が根こそぎ消失せしめられるまで、「百家奏鳴」は、その日常的傾向であり、レーニンに対する種々の反対派の存在とその影響は、無視できないものがあつたし、彼が苦汁をなめさせられたことも再三ではなかった。一枚岩の統一性は、せいぜいボルシェビキの内部にうかがいしることができのみであつた。従つて、レーニンの党建設の過程も、ボルシェビキに依拠しつつ（「一つの分派は、心を一にしなければならぬ」社会民主党協議会の通信文）、党内の対立する傾向と自派とを分離させ、その対立の存在を積極的に明確化しながら、それとの党内闘争

の断固たる遂行を通じて革命的な統一を追求するという努力の不断の連続の過程であつたのである。とはいつても、肝心のボルシェビキの内部そのものも、不断の動揺と分解を繰返していたというのが偽らざる実情であつた。第二回大会の個々の採決の局面におけるボルシェビキ分子の若干の脱落は、「多数派は偶然である」というあげ足をとる口実を反対派に与えたとし、その後の議会参加をめぐる分裂、メンシェビキとの統一に固執する調停主義者の跋扈は、ボルシェビキ内部においてすらレーニンの一貫した指導が体制として確立していなかつた事実を示している。

最大の悲劇は、一九一七年の革命に際し、旧来のボルシェビキ指導部が全く使いものにならなかつたということであつた。その結果、レーニンは、蜂起の事業の殆んど大半をトロツキーその他のメンシェビキ左派に依存して押し進めざるをえなかつた。組織日和見主義に色濃くおかされた彼らを左派とし、それに依拠したことは、度し難い。「右派」への対決も曖昧にした。カメネフという不肖の弟子を追放するに足る結束すら、この左派は保証しえなかつたのである。

もつとも、ボルシェビキの組織活動は、全くの徒勞であつたというわけではない。国際主義左派がボルシェビ

キに吸収されるという形で両者の統一が成立したこと自体、①ロシアにおいて革命派を代表する大衆組織がボル

シェビキのそれをおいて存在しなかつたこと（組織日和見主義者は、如何に個人的な革命性を有しようとする苛酷な条件の下での大衆組織活動に耐えられないことを意味する）、②帝国主義戦争を内乱へ」という戦略スローガンは、トロツキーらの「無賠償、無併合の平和」という空語と異なり、反戦闘争に蜂起につながる権力闘争としての内容を付与しえており、その正当性が二月革命によって実証されたこと、③四月テーゼに代表されるプロレタリア権力のイメージソビエトの革命的意義の把握をレーニンのみが自己のものとして提出しえたことによるからである。

スターリン、ジェノエフ、カメネフ等のレーニン子飼いの指導者が革命的情勢を前に麻痺に陥り、特にその一部が蜂起に敵対した事実は、レーニン組織論の欠陥という結論に短絡させられるべきではない。エルフルト綱領のロシア版たる「二つの戦術」を綱領的内容として結集してきた部分にとつて党的獲得目標を民主主義革命の徹底に置くことの方がむしろ自然だったのであり、四月テーゼが従来の党路線に対する否定、突如侵入してきた異端として彼らの目に映じたのも無理からぬことであ

つた。

四月テーゼ、更には「帝国主義戦争を内乱へ」テーゼは、「二つの戦術」の革命的否定であり、それを根底的に止揚するものであつた。この点の総括が曖昧にされる限り、四月テーゼがレーニンの全くの個人的転換、或は錯乱の産物として他に理解される事態は、避けることができなかつた。せつかくのレーニン組織論も、党の指導の正当性と継承性の根拠としての綱領に正当性と継承性が欠落しては、党の統一性や革命性を保証することは不可能だったのである。

五、綱領に基いた

過渡期の党の政策

資本主義社会の歴史的批判と総括から共産主義社会を展望し、プロレタリア独裁の樹立↓世界共産主義に至る過渡期の具体的な政策をまで立案する根拠となるべき綱領の不備に根底的に規定された「党」の未成熟こそ、十七年革命におけるボルシェビキの立遅れをもたらし、以降の社会主義建設の破綻と世界革命戦争の挫折を必然化せしめる最大の要因となつた。

蜂起を成し遂げたロシアの革命的プロレタリアートには、世界共産主義の実現にむけた革命戦争の遂行を通して社会革命を推進するという歴史的任務が課せられていた。共産主義者としての普遍的使命と「ロシア一国での共産主義は不可能である」という現実(当時のロシア・マルキシストの共通の認識でもあった)を自覚しながらもレーニンは、この難問に対する回答を見出しえなかつた。対独講話をめぐるロシア共産党内部の論争は、ペトログラードにまで迫ろうとするドイツ帝国主義の軍事的圧力にどう対処するかという問題以上のもの——ロシアと世界におけるプロレタリア革命の展望——にかかわって闘わされたのであるが、レーニンは、「ヨーロッパの革命は……到来するであろう。しかしまだ来ていない。……われわれは、未来の全体を賭ける権利をもたない。……」という理由をもってプレスト・リトフスキの講和に踏み切った。

レーニンは、ロシアにおけるプロレタリア権力の維持及び社会主義建設の問題と世界革命戦争とを分離し、二者択一的なものとして理解していたのである。

一方、「世界革命戦争の開始」を主張する左翼反対派の論旨も、「ヨーロッパの諸国民が、帝国主義打倒のためには蹴起しないならば、われわれは打倒されるであろう

プロレタリアートの革命性を最大限に發揮しうる全く新たな組織体系としての軍事組織を創設することが必要である。

ところが、レーニンは、(そしてトロツキーも)クラウゼビッツなどというプロシア軍人の「戦争論」を無批判的に受入れ、真の革命的軍事論を提出しえないまま、ツァー将校の雇用によって赤軍を組織するという誤りをおかしてしまつたのである。

同じ誤りは、労働者による生産管理の問題に際しても繰り返された。一口に生産管理といっても、それは、二種の異なる行為を内に含んでいる。即ち、個々の生産過程における労働者管理とその全社会的規模での統合の計画的推進とである。後者は、労働を自然への埋没から引き離しつつも、それを資本の自己運動的機構のもとに従属させ、疎外する資本主義的生産を根底から止揚することを意味する。それを単なる前者の総和とみなす立場は、アナルコ・サンディカリストのそれであつて、つまるところ、生産を資本主義よりもっとひどい混乱に陥れ、ひいては労働者管理そのものを危くする。従つて前衛党は、生産の全国的計画を立案し、そのもとに労働者を組織することに由る社会的生産のプロレタリア的体系化を社会革命における自己の任務の第一としなければならない。

——それは疑問の余地がない。ロシア革命が闘争の旋風を西欧に巻き起すか、あらゆる国々の資本家どもがわれわれの闘争を窒息させるか、そのどちらかであるう。」(トロツキー 第二回ソヴェト大会の演説)という西欧革命への依存的立場や、「ロシア革命が」「その社会主義的性格を失い、そのことによって労働者大衆の期待を裏切るならば、この打撃はロシアおよび国際革命の未来にとつて一〇倍も恐しい結果をもたらすであろう。」(ラディック)という原則論的立場を一步も出るものではなかつた。「ヴェルヘルムに頭を下げるよりも、社会主義の榮譽をになつて全滅する方が、われわれにふさわしいのだ。」(モスクワ地方協議会の決議)という強がり、世界革命戦争戦略と、ドイツ帝国主義軍隊の粉碎を突破口として世界革命戦争を担う軍事組織(それを支えるプロレタリアの軍事綱領)とを欠落させているため、ドイツ軍の急迫の前にパニクに陥り、いつの間にか立消えになつてしまつたのである。

世界革命戦争に勝利するためには「史上最強に組織された暴力」——帝国主義軍隊とブルジョアの軍事の本質的弱点を適格に把握し、その上に立つて如何に有能なブルジョア軍略家でもつけないことのできない不拔のプロレタリア革命の軍事綱領をうちたてること、そのもとに代行させてしまつたのである。

軍事と同様、生産におけるプロレタリア的方法の体系を発見しえなかつたことがロシア革命のともどもない後退を決定的にした。そしてまた、国内社会主義建設の破綻と世界革命戦争の挫折は、別個な問題ではなかつたのである。多大な犠牲のもとに強行されたプレスト・リトフスキの講和は、結果として何の利益ももたらさなかつた。無内容とはいえ、旺盛だった左翼反対派の革命的エネルギーを封殺したことにより、その後のロシア共産党内の一貫した右翼的傾向は基調づけられたし、ドイツとの停戦は、高価な代償を要求し、しかもそれは、帝国主義との戦争の終結を意味するものではなかつた。干渉戦争と白軍との内戦は、「生産力の温存」すら保証しなかつたのである。

ロシアのプロレタリア政権に対する帝国主義諸国の反革命的介入が必然であった以上、ロシア・プロレタリアートは、対独革命戦争を皮切りに世界解放戦争に積極的に討つて出るべきだった。当時の軍事的情勢は、全く絶望的であつたわけではなかった。ドイツ帝国主義は、敗北の危機に瀕していたのであつたし、ロシアの政治的配置は、講和よりも戦争に組織する方が容易ですらあつたのである。

対独革命戦争の展開を通して「人民解放軍型」の赤軍（軍事・政治・生産の工作者部隊）を組織すること（これは当然、広大なロシア国内に帝国主義軍隊を引き込み、人民の海の中で分断し、せん滅するという人民戦争を意味する。）その過程でロシア人口の九割を占めた農民をコンミニューン型解放区に組織し、都市のプロレタリアートの権力ソビエトの革命的再生によって人民のエネルギーを引出すこと、そうした戦争の遂行を可能にする戦時共産主義体制として経済の全社会的統合を最初から組織すること、即ち、工場ソビエトと農村コンミニューンの革命的結合による戦時共産主義体制と対独革命戦争↓世界革命戦争の組織化、それを組織する工作者としての赤軍の組織化こそが問われていたのである。第一次大戦の末期から東欧↓ドイツにかけて吹き荒れた革命の嵐との

結合は、まさにこのようにして克ち取られるべきだったのだ。

これを放棄した結果が、①農村の組織化の放置（農民の小ブル化、反動化を促進、特に食糧計画の立案を不可能にした抵抗やサボタージュを生み出した）、②都市労働者を世界革命の主体に飛躍せしめえなかつたこと（一般的常識とは逆に、プロレタリア独裁樹立後の経済の結合と計画化は、革命のエネルギーとダイナミズムを最大限に利用する上で、急激でしかも全面的なものがいい。緊張のとけた後の結合は、ブルジョア的反発をうけやすいのである。）、③赤軍の職業軍隊化（二百万人の復員軍人が路頭に放り出され、兵士ソビエトの解体をもたらす。人民解放軍として組織すれば、兵士を組織したまま、しかも革命的な訓練と教育を施しつつ、軍事・政治・生産の工作者として機能させえたのである。——トロッキも赤軍を生産に動員しようと考えたことがあるが、それは、ブルジョア軍隊の規律を労働に持ち込もうとする誤った試みであつた。）であり、ブルジョアの残存物の広汎な温存であつた。

世界革命戦争のもとでの戦時共産主義として社会革命を組織する綱領の未確立は、「党」の前衛党としての未確立を意味した。ブルジョア官僚や経営者に可能なこととして階級闘争に必要な回答の一切が得られるようなものでなければならぬ。ロシア共産党は、この綱領が全く不備、不完全であり、階級闘争の方向を示す現実の指針たりえなかつたことよつて現実の問題に直面するたびに、經驗主義と原則主義、左と右とのジグザグを繰り返さざるをえなかつた。

従つて、「党の綱領を認め、物質的手段ならびに、党組織の一つへの個人的参加によつても、党を支持するものは、すべて党员とみなされる」（ロシア社会民主党規約第一条……レーニンの草案）という「党员資格」の規定では決定的に不十分である。単なる組織員としての基準だけでなく、「党に属する大衆組織に参加して訓練をうけ、組織する能力を実践によつて検証しえたもの」という組織者としての基準が要求されるのである。同時にまた「綱領の理解（組織する内容）に基づくその現実への適用（方針の提出と闘争の組織）能力も検証されなければならぬ」。

党员すべてを等質なものとなすことは、先に述べた如く誤りである。党员は大別して「指導部」と「一般党员」に分類されなければならない。両者の相違は、後者の任務がもつばら、大衆を組織することにあるのに対し、前者は、それに加えて「党员を組織する」という任務を

すらしえないような革命家は、革命家とはいえないのである。これは、単なる技術や知識の修得の問題ではない。世界革命に關つて軍事や生産のプランを立案し、大衆を組織することが「党」の条件なのだからである。ロシア革命の限界は、ロシアの後進性に規定されたプロレタリアートの未成熟にあつたとして大衆に責任転嫁さるべきものではなかつた。未成熟だったのは、党、更には指導部としてのレーニンであつた。革命理論の発展は歴史的制約を伴うとはいえ、レーニンの組織論にあつては、責任を自己以外の何者にも転嫁することは許されない筈であつたからである。

六、党組織論についての若干の考察

前衛党の任務は、プロレタリアートを指導し、社会革命、政治革命の主体として組織することにある。正しい指導を保証する原理的根拠こそ、党の綱領にほかならない。資本主義社会の根本的矛盾たる労働力の商品化の矛盾の解明を起点として出発する科学的体系としての綱領は、その体系としての発展や展開、さらには具体化によ

最大とするところにある。党員を組織し、党を指導する部隊の存在を欠いて党建設を語ることは空語である。党指導部は、綱領を発展させ、豊富化し、それを軸に党を組織し、党をもって大衆を組織することを自己の任務とする。

一般党員には、党綱領の主体的理解をもって党の戦略・戦術を駆使し、大衆を組織することが基準として問われる。これこそ、党員としての「自立」の内容であり、綱領が大衆運動一般の中から自生するものでない以上、「自立」という名のもとに党員一般に綱領の作成や基本方針の提出という指導部の果すべき責任まで負わせるのは間違いである。

「プロレタリアは、孤立した個人としてはとるにたりないものである。彼は、彼のあらゆる力、彼のあらゆる進歩、彼のあらゆる期待と希望とを、組織から、すなわち、同志たちとの計画的な協同行動の中からくみとる」（カウツキー）ということは、党と共産主義者とを対立させたり、個人に党を従属させたりするという発想から党を論じてはならないこと、即ち、「共産主義者は、党組織に参加することによって初めて自立しうる」こと、端的に表現すれば、組織あつての個人であり、組織を欠いての自立はありえないことを意味している。

大衆を組織するという党員の任務から導びき出される基準は、①大衆にとけこめること（工作者としての資質）②党員としての作風を獲得していること（大衆を組織する主体としての権威を大衆自身によって認められることを意味する）である。大衆から独立しつつ大衆を組織する——自立した工作者としての組織への献身性こそ党員の備えるべき資質である。

激化する世界危機と

工場占拠闘争

ニクソン訪中・ドル緊急措置は何を意味するか

大杉 高志

インドシナ革命戦争に手を焼き、足までも焼いたニクソンが「封じこめ下の平和」という戦後世界政治の常識を破って、七月十五日訪中決定を発表した。また内なるスタグフレーションとヨーロッパでのドル売りに攻め立てられた彼は、つづいて八月十五日、開かれたドルを前提とした戦後世界経済の常識を破って、ドル金交換の全面停止、一〇%の輸入課徴金などのドル緊急措置を発表した。あいついで起ったこれらの新政策の衝撃的発表はいったい何を意味するか？そして八月一六日以来二週間足らずのあいだに五〇億ドルにおよんだドル売りに耐えかねてついに一ドル＝三六〇円の固定為替制を放棄した日本帝国主義への影響は？疑いもなくアメリカ帝国主義を盟主とする資本主義の戦後世界体制は、いまや政治的軍事的にも、また経済的にも、なだれを打って崩壊しつつある。六八年三月一七日のドル・金交換の事実上の停止とフランス五月革命にはじまった史上第四番目のあらたなる世界危機はここへきて一段と深まり、その絶望的性格をいっそうあらわにした。そしてインドシナからパレスチナ、チリまで、フランスから日本、アメリカまでの全世界の革命闘争にふたたび、しかもいっそう大規模な高揚の機会を準備しつつある。

I ニクソン訪中

世界政策のほころびを

つぎはぎしうるか

(一) 大統領に就任したニクソンのまえに立塞があった。第一の難問は、アメリカ世界政策のアジアでの破綻であった。

それはたんなる世界政策の破綻ではなかった。戦後主としてその世界政策によって国民をイデオロギー的に吸収統合してきたアメリカ帝国主義にとって、世界政策の破綻はただちにもっとも致命的な国民統合の崩壊を意味したのだ。ブルジョア・ジャーナリズムでアメリカ国民の価値喪失、挫折感と呼ばれているものが、それにほかならない。

ニクソン訪中はこの難問に対する彼の回答であり、世界政策のほころびをつぎはぎして、国民統合をとりもどそうとする彼の必死の試みにほかならない。

69 激化する世界危機と工場占拠闘争

(二) 戦後世界危機の時代の階級闘争をおして形成

され定着したアメリカ帝国主義の世界政策は、対ソ封じこめ軍事体制の完成を前提とした対ソ平和共存・対中孤立化政策であった。それは、戦後世界危機をめぐる階級闘争がヨーロッパでは大国間の取引によって屈折した冷戦となり、いちはやくアメリカ優位の「力の均衡」にもとづく冷戦体制が生み出されたこと、しかしアジアでは中国革命の勝利をおして東アジア全域の革命戦争となり、アメリカ帝国主義は「力の均衡」を確認させてその勝利をかるうじてくいとめたものの、みずからも戦略体制を十分再編しえぬまま、不安定な休戦を膠着させたいわば限定局地戦体制というべきものが生み出されたことに対応するものであった。

だが、このアメリカ世界政策は六〇年インドシナにふたたび革命的内戦の火の手が上がると、これへの反革命的介入をおして二側面から破綻に追いこまれた。

第一にジョンソン政権の末期、五〇万を超える米軍をもつてしても、わずかに点と線を確保するにすぎず、北爆も北ベトナムを停戦に追いこむことができないことが明らかになったとき、そして彼が六八年秋北爆停止と大統領不出馬を発表したとき、ついにアメリカ世界政策のアジアにおける無残な破綻は軍事的にごま化しようのないものとなった。最近暴露されたベトナム報告書はその

破綻を無慈悲に証明している。

そしてこのとき、アメリカ帝国主義はいちはやくこの戦場に背を向けて逃げ去った西ヨーロッパ帝国主義諸国からひどく孤立していたばかりか、死傷者の累積、兵士の戦意低下、麻薬患者の激増と残虐行為の暴露などからついに「アメリカ的生活様式」防衛という戦争理由、アメリカ的「正義」を大衆的に疑われるに至った。

しかもさらに、反革命的介入自身が促進したドル危機から、オーバー・コミットメント修正の要請という追い打ちがかかったのだ。

ともかく、インドシナ戦場での軍事的破綻こそアメリカ世界政策破綻の主要な側面にほかならない。

だが第二に、インドシナ革命戦争はまた、ソ連修正主義を告発し米ソ取引を牽制しつつ、革命戦争の貫徹を積極的に支援した中国をアメリカの孤立化政策を突き破って、国際政治の舞台に大きくクローズアップせずにはおかなかった。インドシナ革命戦争は、アメリカ優位の「力の均衡」を前提とした米ソ平和共存取引体制をこの面からも解体しはじめたのである。そして、アメリカの必死の工作にもかかわらず、七〇年秋の国連総会で中国招請国府追放のアルバニア決議案が多数を制したとき、アメリカ世界政策のアジアにおける破綻はいま一つの政治

的側面からも蔽うべくもないものとなった。なぜなら、国連とはアメリカ帝国主義の権力外交、米ソ取引を合理化し、そこへ諸国政府を結集するいわば国際議会にほかならず、その舞台からの中国の排除こそは、アメリカ帝国主義の中国孤立化、国府への軍事的テコ入れ政策を合理化するための不可欠の手段にほかならなかったからである。

いずれにせよ、アメリカ帝国主義にとってその世界政策の破綻は重大な意味をもつ。このまま放置するならば、アメリカ帝国主義のアジア戦略体制はじり貧崩壊へ向かわざるをえないばかりか、その消耗によってヨーロッパ戦略体制におけるヘゲモニーさえ麻痺せざるをえない。

そしてまた戦後主としてその世界政策によって国民をイデオロギー的に統合したアメリカ帝国主義にとって、世界政策の破綻はもつとも致命的な国民統合の崩壊となつてはねかえってこざるをえないだろう。

(三) ニクソンはだからこそ、ほかでもない世界政策の修正を、ベトナム和平と中国との平和共存を公約に掲げて登場してきた。

世界を驚かしたニクソン訪中決意は、したがってアメリカ側からいうなら突然の出来事ではけつしてない。それはニクソンが就任以来政権の命運をかけていた作業の

必然的な産物にはかならない。

そしてニクソンの最初の取引の狙いもまた明らかだろう。彼は朝鮮休戦にもちこみ米ソ平和共存を実現したアイゼンハワーにあやかるうとしていたのだ。

中国政策を転換し、多数決で押しきられぬまえに中国の国連代表権を承認し、かつ台湾から手を引き、その代償に中国を国連の取引の場に抱きこみ、かつ台湾の武力解放を諦めさせる、そしてあわよくばそれをおとしてさらにインドシナ休戦も「名譽ある撤退」の取引にもちこもうと、これがニクソン訪中のかくれもない狙いなのだ。

(四) とところで、ニクソンは成功するか？ 否！

ニクソンにとって不幸なことに、インドシナ戦争は朝鮮戦争ではないし、七〇年代は五〇年代ではない。朝鮮戦争が戦後世界危機の階級闘争のしんがりをつとめたとすれば、インドシナ戦争はあらたな世界危機の先駆をつとめている。五〇年代が戦後世界危機から相対的安定への時代であったとするなら、七〇年代は相対的安定からあらたな世界危機への時代である。

だから、長期的にみてニクソンの企みはけつして成功しないだろう。一つの休戦はつぎの二つの開戦をもたらすだろう。一つの撤退はつぎの二つの介入要請となつて

はねかえってくるだろう。

(五) ただ、中国は、アメリカ帝国主義の誘いに乗って、ニクソン訪中招請を發した。中国は、明らかに国連代表権をえること、そしてアメリカ帝国主義に台湾から手を引かせ、台頭する日本帝国主義に肩代りさせないことを主要な目標として、ニクソンを招請した。

だが、国連代表権獲得によって中国が失うものはなに

か？ 国連とは戦後世界体制を特徴づける国際議会であり、中国自身が告發したように「米ソ取引の道具」ではなかったか？ それに、国内政治においても革命党が議会を利用するのは安定期においてのみであり、危機の時期には議会ポイコットこそが正当な戦術となる。ところで、中国自身世界政治の現段階をすでに「第一中間地帯」から世界革命が開始された時期と考えているのではなかったか？

とするなら、国連の代表権を獲得することによって中国が失うのは、米ソ取引の戦後世界体制に対する鋭い革命的告發者、その解体の革命的指導者としての地位以外の何物でもない。

また、台湾について、表面は内政問題としつつも、裏で武力解放はしない、平和解放でゆくと約束することは

何を意味するか？

なるほど、中国だけの問題としてみるならば、七億のまえに三千万は支えきれぬものではあるまい。アメリカ帝国主義のうしろだてを失った国民政府は、おそかれはやかれ屈服せざるをえないだろう。だが、第七艦隊はいったいどこへ行くのか？ フリー・ハンドをえたアメリカ帝国主義は、その力をアラブ・ゲリラの圧殺のために、あるいはまた中南米のあらたにはじまるであろう革命に向けるのではないか？

とするなら、一見して大人風の平和解放は、中国が、みずからの血の犠牲のかわりに世界各地の革命の血の犠牲をもって、台湾を解放することを意味する。ここでもまた、中国が失うのは、世界革命の指導者としての地位以外の何物でもない。

(六) 中国外交は、四九年の人民共和国成立後これまでつぎの四段階を経てきた。

第一期(四九〇五三年)。一面では修正主義ソ連に従順で、向ソ一辺倒であり、それがNATO条約体制阻止の道具として西ヨーロッパの共産党に武装闘争を呼びかけたのとダブらせながら、劉少奇テーゼをもってアジアの共産党に武装闘争を呼びかけた。だが、これは内容的には、勝利した中国革命の熱気を背景にまだ収拾され

ないアジア危機の革命的突破を狙ったもので、したがってこの間ブルジョア政府に対する取引外交は後景に退いていた。

第二期(五三〇五八年)。依然向ソ一辺倒のまま、「力の均衡」とそのもとの戦後アジア危機の出口を失った状況を確認して、朝鮮、インドシナをソ連とともに大国的取引によって休戦にもちこみ、そのごアメリカのSEATO工作に対抗して、くさびを打ちこむ目的から後進中立主義諸国のブルジョア政府を相手に平和五原則外交を展開した。これは同じ時期にソ連によって展開されたアメリカ帝国主義を相手とする平和共存外交とは異質のものであった。

第三期(五九〇六五年)。第三世界への不況のしわよせとともに第三世界の階級闘争がふたたび先鋭化してくると、中国の平和共存外交は麻痺に追いこまれた。アメリカ帝国主義の工作によって中立主義「民族の父」政権はつぎつぎにクーデターによって倒されたからである。そのなかでベトナム革命が力強く進撃を開始し、その支援、アメリカ帝国主義に対する闘争をめぐって中国外交はしだいにソ連と対立するようになったが、なおそのベトナム革命支持は必ずしも積極的なものではなく、中国外交はあたらしい世界危機の第三世界での先駆的開始

に明らかにおくれをとっていた。

第四期(六六〇七一年)文化大革命によるブルジョア実権派打倒をとおして、修正主義ソ連に対する対決をいっそう鋭くするとともに、ベトナム革命支持、ついでアラブ・ゲリラ革命派支持を積極化した。しかし、他面ではなお第三世界諸国に対する平和共存外交に執着し、セイロン、パキスタンなどでの革命的大衆運動の爆発に沈黙し、弾圧するブルジョア政府を犯罪的に支持しつづけたのである。これは文化大革命自身の不徹底、中間派の温存と対応して、中国外交がなおあまいまいな無原則な中間主義的性格を残しているものといわねばならない。

このようにみるなら、今回の中国外交の「新展開」がどのような性格のものかは明らかであろう。われわれはそれに、文化大革命をもってしても正しえなかった中国外交の無原則な性格が拡大されてあらわれていることを黙って見過すわけにはいかない。もしアメリカ帝国主義のさきのような取引にひきこまれるなら、それは革命側にとって途方もなく高くつくこととなる。それは革命側が帝国主義の苦境をそれだけ和らげ、世界革命の前進をそれだけおくらせることとなる。

われわれは、中国革命の偉大なる勝利を評価できもしない観念的な反スタ・イデオロギーからちやちやな批判を

投げかけるのではなく、そしてまた安っぽく毛沢東主義の大人外交に拝跪するのでもなく、中国外交の「新展開」をこれまでの全展開のなかに正しく位置づけその危険な性格を鋭く批判しておかねばならない。

II 金・ドル交換全面停止、

一〇%輸入課徴金

ブレトンウッズ体制の終焉

(一) ニクソンのまえに立塞がった第二の難問は、深刻なスタグフレーションであった。

スタグフレーション、すなわち停滞と失業下のインフレは、安定成長と完全雇用をうたい文句とする「福祉国家」の文字通りの破産を意味する。国民のイデオロギイ的吸収統合のもう一つの崩壊を意味する。アメリカ帝国主義は世界政策の破綻によってばかりか、スタグフレーションによっても、国民的合意を、そのよって立つイデオロギイ的基盤を致命的に失おうとしていたのだ。

そして今回の金・ドル交換全面停止、一〇%輸入課徴金をおもな内容としたドル緊急措置は、この第二の難問

に対するニクソンの回答であり、国民統合を挽回しようとする彼のもう一つの試みなのだ。そして、かれは、第一の試みに着手して国民再結集にある程度成功するや、直ちにこの第二の試みに着手したのだ。だから、両者は最初から一貫した戦術だったのだ。

(二) スタグフレーションは、六九年一月からアメリカを襲った景気後退とともに表面化してきた。

鉱工業生産は六九年八月から落ちはじめ、実質GNPは六九年第Ⅳ四半期と七〇年第Ⅰ四半期に減少し、景気総合指標でみると、六九年一月から七〇年一月まで下降、そのごいまだにはかばかしい回復はあらわれていない。そして操業率は七〇年第Ⅳ四半期には七二・三%と一二年半ぶりの低水準に落ちこみ、完全雇用に近い三%そこそこの水準にあった失業率は、七〇年一月にやはり一〇年ぶりに六・二%にまで上昇、七一年五月にもふたたび六・二%を記録して一向に下がっていない。現在黒人とティーン・エイジャーがとくに目立つ五二〇万の失業者が溢れている。ところが、こうした不況にもかかわらず、六八、六九兩年にアメリカとしてはじめての四%台にはね上がった消費者物価上昇のテンポは、七〇年には五%を超え、七〇年一月〜七一年五月でも年率四・三%、そして六月には年率七・二%の上昇を記録

したのである。

しかも、このスタグフレーションは、同時に対外的には異常な不均衡をつくり出した。七一年前半の貿易収支はついに赤字に落ちこんでしまった。年間をとおしても貿易収支がじつに八〇年ぶりに赤字になることは確実なのだ。気狂いじみた伸び率で、日本、西ドイツ、カナダから自動車、電機製品、鉄鋼などが流れこんだ。そして西ヨーロッパではふたたびドル不安が発生し、通貨当局はユーロ・ダラーのたらいまわしをはじめたのだ。

(三) こうしたスタグフレーションの原因はしごくはつきりしている。

不況と失業増があらわになってくるとたちまち、ニクソンは悲鳴をあげ、とくに金融的な景気刺激策による追加購買力は生産回復の呼び水とならず、ほとんど独占的な金融資本の製品価格引上げおよびそれと二人三脚的に取引した労働組合の賃金引上げに吸収されてしまったからだ。

再生産機構の中央部を部分的に組織化した強固な独占体に対しては財政金融引締めによる古典的な規制は効果をあげず、操業率と就業率の操作により価格を維持して抵抗され、引締め緩和は価格吊上げに吸収されてしまう、その結果慢性的な停滞からぬけ出せない——これは経済

内部の成長力を失ったアメリカ帝国主義の内部世界的蓄積に特有な業病にほかならない。

もともとこの業病は戦後にも一八五七〜五八年不況においてすでにあらわれてきた。だが、そのごアメリカ帝国主義は、民主党政権によってその業病の対外的表現としてのドル危機を「恐怖の団結」のもとでの「国際金融協力」のたすけを借りて防衛しつつ、対内的には、ニュー・エコノミックスを利用して、赤字軍事財政支出の呼び水効果、技術革新効果に、賃金物価についてのガイド・ライン設定、労働争議、独占価格引上げへの強権的介入を加えて、かなりの成績をふたたび実現しえたのだった。その成功は、六七年秋から爆発したポンド・ドルに対するとりつけ、深刻な通貨体制の動揺をも、国内にほとんど影響させず（六七年第四四半期にのみ実質GNP減少のミニ・リセッション）、そのごもいわゆる「金二重価格制」の採用によってドル不信をヨーロッパ通貨の切上げの方へ厚かましくも転嫁して、じつに一一〇カ月もの好況的蓄積を保証するほどに鮮やかだった。

しかし、何事もけつこうずくめとはいかなかった。アメリカ帝国主義は国際収支、とくに貿易収支のいっそう破滅的な悪化をおして、けつきよくこの業病と再会しなければならなかった。なぜなら、国際収支の悪化、金

流出こそは、好況的蓄積の進行にもなつて成熟する再生産過程の内的矛盾の表現であり、またその矛盾の解決を媒介する世界貨幣としての金の働きにほかならず、その働きの遮断し、国内の好況的蓄積をひきのばすことは、けつきよく成熟した内的矛盾を解決せず、いっそうそれを深刻化し、ますます国際収支赤字、金流出を破滅的にするだけだったからである。

業病との再会は、六八年からますます破滅的となった景気過熱、物価上昇、対外的不均衡激化、その結果として貿易収支悪化（黒字幅がこれまでは三〇億ドル台から一〇億ドルそこそこ落ちた）に対処するためのきびしい金融引締め、およびそれに追い打ちしたニクソンのきびしい緊縮黒字財政によって不可避となった。アメリカ帝国主義は、六八年一〜三月のゴールド・ラッシュが劇的にせまった蓄積の規制を、いったんはごま化しながら、二年たらずでけつきよく受入れざるをえなくなつた。そしてそれとともにみずからの停滞的体質にいやでも再会しなければならなかったのだ。

(四) ニクソン緊急措置はまさにこうした破局的なスタグフレーション対策として打ち出された。

ニクソンの意図は彼の演説に露骨にあらわれている。訪中決定を戦争終結への前進として確認したうえで、

ニクソンは「戦争なき繁栄」のため「偉大な国民」に三つの行動を提起する。「第一により多くの、よりすぐれた職場を創出すること、第二に生計費の上昇をおさえること、第三に国際通貨面で投機家の攻撃からドルを守ること」。

この三つの行動の順序がおのずから新措置の性格を明らかにしている。それは何よりもまず内向きの政策、安定成長と完全雇用のための国内優先政策であり、通貨措置はいわばその尻ぬぐいとして、後仕末として提起されているにすぎない。

内容をみよう。

第一の失業対策としては、三つの減免税だ。とすると、すでに年間二〇〇億ドルにのぼっている財政赤字のいっそうの激増は必至だろう。ただし歳入源が埋め合わせられるかぎりでは、官庁合理化、対外経済援助一〇％削減などによってだ。だが、この国家財政節約策はまったくのゼスチュアにすぎない。

第二の物価対策としては、九〇日間の物価・賃金凍結だ。新自由主義のニクソンがいまやこれまででもっとも徹底した所得政策を発表した。これは財政インフレが必至である以上、必要不可欠なのだが、ニクソンにとつて不幸なことに、強権的な所得政策が成功したためしはこ

れまでない。だから、実際にはそれは、半ばゼスチュアにすぎないのだ。

第三のドル対策としては、ドルの金あるいはその他通貨との交換停止、一〇％輸入課徴金、そして国際協力のもとでの為替レートの多角調整だ。これはみずから招いたスタグフレーションによる競争力の低下を、投機家と不正な為替レートを固執しようとする諸外国の責任として開き直り、ドルを一方的に紙切れと宣言し、ドル為替を変動させ、そのうえで強い通貨を平価切上げに追いこもうとの狙いなのだ。

(五) ニクソンはもはや国際収支赤字、金流出によって迫られている内的矛盾の規制、とくにはなほだしくなつた対外的不均衡の調整を自国の負担でやる考えをまったく放棄してしまった。そして内部均衡(成長と完全雇用)優先の政策をとり、その結果予想される国際的な不均衡激化に対しては、「金の廃貨」の前進を叫び、「不公正な」為替レートの是正(じつは諸外国の平価切上げ)を実行行動によって迫らうというわけなのだ。そしてウォール街で起つた史上最大の株価暴騰は、ニクソン万才の歓呼である。まさに一九三〇年代の「経済的ナショナリズム」、「近隣窮乏化政策」の再来だ。

だからまた十カ国蔵相会議その他の協議は、アメリカ

の困惑どおりにはけっしてすすまぬだろう。帝国主義諸国の経済的エゴと経済的エゴとが衝突するだけだろう。そして一定の多角調整に到着するまでには、変動為替の戦国時代が相当期間つづく可能性が強い。

なるほど、一九七〇年代は一九三〇年代ではない。「恐怖の団結」下の「国際金融協力」はさらに数歩後退するだろうが、なおもつづくだろう。したがって、今回もまた、通貨混乱がただちに各国内の信用崩壊に波及して、再生産と雇用の異常な収縮をもたらすというすすみ方で、世界危機が荒っぽく深化することはないだろう。だが、そのかわり、世界危機は、混乱的収縮を抑制されながら、かえってそのためにもかくも成長とそしてまたインフレ的物価騰貴を持統して、内外の安定と均衡をますます致命的に破壊する方向にすすんでいる。これはこれで、国内的には「福祉国家」の破綻とおして、国際的にはいっそう深刻な通貨混乱と犠牲の諸外国への転嫁とおして、内外にあらたな革命的高揚の機会を準備すること、果して疑問の余地があらうか。

III 激化する世界危機の現局面

(一) 戦後世界体制の崩壊は、われわれがいちはやく確認してきたように、ドル・ポンド体制の危機、その崩壊としてはじまった。

なぜなら、アメリカの反共封じこめ世界政策によって形成された資本主義の戦後世界政治軍事体制は、米ソの「力の均衡」のもとに膠着したが、それを前提とし、これを支えるものとして編成された資本主義の戦後世界経済体制は世界市場の不均等な生産力の発展とともに固有の矛盾を成熟させた。その固有の矛盾とは、世界市場の主要な生産力の不均等発展が、内部世界的な蓄積の中心国アメリカとEC諸国および日本とのあいだのそれであったことに依りて、世界市場の不均衡の累積としてあらわれ、資本主義の戦後世界経済体制の基礎的枠組みであるドル・ポンド体制を根底から脅かすことになった。そしてその崩壊の開始と同時に、経済的支えを失いはじめた資本主義の戦後世界政治軍事体制もまた動揺と崩壊を開始したのである。

(二) ドル危機は一九六〇年秋ロンドン自由金市場における金価格暴騰にはじまった。これは戦後のもっとも深刻な不況に対して五八年から採用されたアメリカのインフレの景気刺激策が、大幅な国際収支赤字、短期債務累積と金流出となつてあらわれ、ドル不信を生じた結果であつた。しかし、すぐさま実行に移された「国際金融協力」とドル防衛政策の展開はドル危機を潜在化させ、この段階で世界経済の全面的動揺をいっきに表面化させはしなかつた。そしてこの「国際金融協力」とドル防衛政策の展開は、同時に、国内危機、国内階級決戦を媒介としない戦後体制のなしくずしの再編の開始を意味したのであつた。

だが、第一にドル危機は、すでに慢性化していたポンド危機の打開を絶望的にし、かつポンド防衛をドル防衛の最前線の地位に押し上げるとともに、深刻な不況圧力を世界市場、とくに西ヨーロッパ諸国にもたらした。その結果が六三年西ドイツ不況を皮切りとした六四―六五年EEC諸国の深刻な不況であり、また日本のはじめて高度成長をさえぎつた本格的な不況であつた。

また第二に、不況圧力はいっそう強く後進諸国にしわよせされたわけだ。後進諸国は第一次産品価格の下落、工業化の挫折によって大部分が国家的破産状態に追いこ

他方、この間第三世界の危機もいっそう深まつた。そしてベトナム革命戦争はアメリカ帝国主義の軍事介入を呼びこみこれを打破つてインドシナ全域に拡大し、アメリカ世界政策の崩壊の開始をも告げ知らせた。その衝撃が主因となつて、日本帝国主義にも反戦基地闘争や学園占拠・都市反乱の高揚をもたらしたのである。

ここまですが第二段階であつた。このときはじめて戦後資本主義体制の世界危機は全面化し、あらたな世界革命は第一の世界的高揚局面を迎えたのである。だが、革命はインドシナをのぞいてまずその緒戦に敗れた。

(四) 第三段階はこうしてインドシナをのぞく諸地域での反革命の束の間の勝利をもつてはじまつた。だが、いまやふたたびいっそう根底的な資本主義世界体制の崩壊とあらたな世界革命の第二の高揚の機会が準備されつつあるといわねばならない。

第一に、破産した反革命戦争をみずからインドシナ全域に拡げた末に、訪中によつてその世界政策のつぎはぎ的修正に走ろうとするニクソンの企みは、その意図とはまさに正反対に、成功をえられぬまま、必ずやアメリカ世界政策の麻痺と左右への深刻なブレを引きさずにはない。そしてそれはアメリカ国内の国民統合をますますはなばなしく破壊するばかりか、アメリカにたよつてき

まれた。世界危機はこうしてまず先駆的に後進諸国から部分的局所的にはじまつたのである。その焦点となつたのがベトナム革命戦争であることはいうまでもない。そして後進諸国にひろまつた危機を背景に、その資本主義的救済のためのいわゆる南北問題が登場してきたわけである。

ここまですが第一段階であつた。

(三) しかし、不況に陥つたEEC諸国および日本には猛烈な輸出ドライブがかかり、その圧力はけっきょくアメリカ、イギリスを襲い、けっきょく異常なテンポで拡大する世界貿易のなかでドル・ポンド防衛と「国際金融協力」は第一の限界につき当ることとなつた。その帰結が六七年一―月のポンド平価切下げであり、六八年三月のドル制限つき自由金交換停止であつた。ドル防衛と「国際金融協力」は数歩後退し、西ヨーロッパ諸国の為替関係は恒常的な動揺のなかへ投げこまれた。

しかも時を同じくして、EEC諸国の不況切りぬけのための国内合理化、強権的所得政策もまた第一の限界につき当つた。学園反乱を直接のきっかけとしてフランスに工場占拠・反乱が爆発した。

こうして世界危機はいまや明らかに世界帝国主義体制の基幹部分を端緒的にとらえはじめたのだ。

た諸国、とくにアメリカが手を引く懸念のある東アジア諸国の深刻な外交麻痺ひいては政治危機を生みださずにはないだろう。

第二に、アメリカのあらたなるドル緊急措置は、さしあたりアメリカ国内に景気回復の条件を与えるものの、諸外国をアメリカ市場から閉め出し、犠牲を諸外国にまゐるまる転嫁することとならずにはない。したがって、アメリカ帝国主義とその他帝国主義諸国の対立、為替戦争、経済戦争を先鋭化し、さらにこれら諸国内では、しわよせされたこの犠牲の人民大衆への再転嫁をめぐつて階級闘争をふたたび燃え上がらせることは火を見るより明らかである。

IV 工場占拠闘争の条件の成熟

―怒りろうばいし意気消沈する

日本帝国主義

(一) ニクソンの二つの新政策発表は、日本の支配階級にとつて二つの平手打ちだつた。

ニクソン訪中決定もドル緊急措置も、二つながら忠誠

心に溢れた日本の政府・支配階級をつんば棧敷においた一方的措置であり、しかも日本の政府・支配階級をもっとも深刻に脅かす内容をもっていた、だから、新政策発表を聞いたとき、佐藤はまず無視された怒りをぶちまけ、ろうばいし、そして内容の重大さがわかるにつれ、意気消沈したのだ。

日本帝国主義はいまや、政治的軍事的にも、そしてまた経済的にも、これまでの存立条件を根底から破壊されようとしている。そして成算のある再編成の展望が立たず、あまりにも深刻な進路の選択のまえに立ちすくんでいる。

(二) 第二次世界大戦後、侵略の獲物を失って無一物となった日本帝国主義は、中国革命の勝利とアジア革命戦争の進展の激動するアジア情勢のなかで、破綻したアジア戦略体制を再建しようとするアメリカ帝国主義によって、政治的軍事的に動員された。そしてアメリカ帝国主義のアジア戦略拠点として、その「核の傘」のなかに編成されたのである。ただ、日本の政府と支配階級は、最初の敗戦と核の洗礼によって打ちのめされた国民の強固な平和主義に真正面から挑戦できず、ましてや侵略したばかりの中国を相手とした政治軍事同盟に向けて国民を積極的にイデオロギー統合できなかった。したがって、

「核の傘」には入りながらも、对中国政策をかなり曖昧にしたまま、アメリカが要求する東アジア条約体制構築への参加を渋り、みずからの再軍備努力をもできるだけさばるといふ対応をとりつづけてきたのだ。すなわち、対米追隨基調のうえでのアメリカの要求のできるだけのサポータージュというのが、無定見でしかし虫の良い日本政府・支配階級の対外政策ならぬ対外政策であった。

また、日本帝国主義は、まさにこうしてアメリカ帝国主義のアジア戦略体制に政治的軍事的に動員されることによって、その経済的再建をなしとげ、その驚異的高成長の基礎を築いたのであった。すなわち、アメリカの経済援助、朝鮮戦争による特需、在外軍事支出などのドル撤布によって、はじめて日本経済は蓄積に必須な金融的条件を与えられた。また原料資源をアメリカ資本に市場を主としてアメリカ本国およびドル撤布を受けた東南アジアに、それぞれ求めて、その蓄積の実体的条件をも与えられた。そしてこうした条件を前提としてはじめて、日本帝国主義は、設備投資誘導型の驚異的な高成長を実現しえたわけである。したがって、これまでのドル・ポンド通貨体制崩壊が「国際協力」下になしなく崩壊、なしなくプロロック化の過程をたどったことによつて最大の利益を受けたのもまた日本帝国主義だった。「

国際協力」による世界市場保全は、日本帝国主義のためにあつたといつても過言ではない。

(三) だが、アメリカ帝国主義の二つの新政策は、現在、日本帝国主義のこれまでの存立条件を、政治的軍事的にも同時にまた経済的にも無慈悲に破壊しようとしている。

第一に、ニクソン訪中に代表されるアメリカ帝国主義の世界政策、とくにアジア政策のつぎはぎ修正の動きは、無定見な対米追隨をつづけてきた日本政府に平手打ちをくわせ、混乱におとしこんだ。そしてアメリカ政府自身のつぎはぎ修正の動き自身がうまくゆかず、左右のブレと動揺をつづけるとすれば、日本政府の中国政策、アジア政策、そして軍事政策全体がいっそう大きく揺れ動かざるをえないだろう。

しかも、困難は、アメリカ帝国主義がばあいによって台湾やベトナムを捨てうるのに、東アジアに位置する、そしてそこにもっとも緊密な経済的および政治的軍事的利害を有する日本帝国主義は、容易にそうはできない点にある。

アメリカ帝国主義に肩代りする覚悟で東アジアを政治的軍事的にも引受け、中国に敵対するか、それとも東アジアへの軍事的コミットを避け、自主外交によってアメ

リカ帝国主義をだしぬいても日中国交回復、日中平和共存へもちこむか？日本帝国主義はいまや重大な選択を迫られている。

だが、これは、対外政策ならぬ対外政策をつづけてきた日本政府と支配階級にとつて、あまりにも重大な選択である。いづれをとるにしても容易に成算が立たない。

中国に敵対するといつても、かつて日本帝国主義は、日米太平洋戦争のまえにすでに中国の人民遊撃戦争によって消耗させられたのではなかったか？ だがまた、日中平和共存といつても、アジア革命戦争の芽づる式の波及を放任しうるだろうか？

だから、選択が困難であればあるほど、日本政府と支配階級はハムレットのように逡巡しつつ、ますます無定見その日暮らしのうちに右へ左へ揺れ動かざるをえないのだ。

げんに、中国代表権問題をめぐる佐藤内閣の答弁はみっともなく揺れ、日中貿易推進派の自民党議員は野党と手を組む動きに出ている。佐藤までが葬儀にやってきた中国の老人に会いたくてそわそわしている。そして財界では、新日鉄、トヨタが台湾・韓国から手を引いたかと思えば、政府は韓国の新五カ年計画に全面的に肩入れし、三菱重工業は逆に台湾・韓国にのり出している。

支配階級国家権力のこうした動搖と内部抗争は、もともとあやふやな彼らの国民的權威を失墜させ工場・職場・学園をはじめあらゆる体制組織内において蓄積される反乱気運の噴き上げにこのうえない政治的促進剤となるに違いない。

(四) 第二に、アメリカ帝国主義のドル緊急措置は、スタグフレーションにつけこみ異常な輸出攻勢をかけている日本に、もう一つの平手打ちをくらわせた。それは日本帝国主義が戦後経験したことの無い痛打である。史上最大の株価暴落はその痛さを雄弁に物語っている。ようやくみえかけていた不況底入れは吹飛んでしまった。

日本の七〇〜七一年不況は国際通貨不安に備えるための予防的金融引締めからはじまった。だが、自動車、家電の需要一巡が表面化し、それに繊維のきびしい自主規制も加わって、これまでの内部的な高成長を牽引した設備投資の牽引力のいっそうの衰えが明らかとなった。落ちこみはひどくないが、つぎにあらたに牽引する産業が見当たらない。こうして、六四〜六五年不況が「なべ底不況」と呼ばれたのに、今回の不況は、すでに緊急措置発表以前に、底は深くないが回復のいっそうおくれる「受け皿不況」と呼ばれるに至っていた。

こうした内需不振から重工業にこれまで以上に猛烈な

輸出ドライブがかかったのだ。なかでも自動車、カラー・テレビなどの対米輸出は、現在前年同期比二倍というすさまじさだ。かくて六四〜六五年不況の輸出ドライブが日本の貿易収支をはじめて黒字に導いたとすれば、七〇〜七一年不況のそれは日本の貿易収支黒字を世界一に押し上げ、飛躍的な金外貨蓄積一現在すでに一二〇億ドルへ導いた。

だが、こうした日本帝国主義の世界経済における立場の強化こそが、アメリカ帝国主義を中心とする資本主義の戦後世界経済体制を突き崩し、再編する尖兵の役を果したのだ。

だからこそ、アメリカのドル緊急措置は、何よりもまずその狙いを日本に向けている。アメリカ国務省の試算によれば、日本の輸出総額のじつに二九%が輸入課徴金の被害を受けるはずである。これはイギリスの八%、西独の九%が被害を受けるのとは比較にならぬ深刻さだ。そしてアメリカ政府はこの課徴金をどう喝手段としつつ、日本に二〇〜二五%の円平価切上げを迫っている。しかも、アメリカ政府は平価切上げだけでは課徴金を廃止せず、円八項目対策に盛り込まれた貿易・資本自由化の即時実施、対米輸出自主規制の強化などいっさいの日米懸案をこのさいいっきに「解決」しようとの決意である。

固有の経済領域をもたず、資源をもたぬ日本帝国主義がもっともおそれていたことが現実となった。日米経済戦争の激化の結果としてアメリカ市場から露骨な締め出しをくらうということだ。

すでに日本政府も円平価維持方針を捨て去った。八月一六日以来二週間足らずのあいだに五〇億ドルにおよんだドル売り攻撃に耐えかねて、ついに一ドル＝三六〇円の固定為替制を放棄するほかなくなったのだ。そしてこれがすぐさま円切上げにすすむか、それとも限定つきの変動相場制をつづけるか？ それは主としてヨーロッパ情勢待ちである。だが、そのヨーロッパもEC内部の独仏対立が解けず、かえって日本の行動待ちとなってしまう。

しかし、いずれにせよ、アメリカ帝国主義はその狙いをとくに真正面から日本の電機、自動車、鉄鋼独占にしているのだ。一〇%課徴金と事実上切上がった変動為替、あるいは一〇%を超える円平価切上げは、これら独占体に対しても手痛い打撃を与えずにはおかない。そして、にもかかわらず、シェアの確保拡大のためにこれら独占体はなおも採算割れさえ顧みず、死に物狂いの輸出強行をつづけるにちがいない。

とすると、いったいこの犠牲はどこに転嫁されるのか

？ それはまたしても同じだ。国内の工場労働者、市民大衆、そして系列中小企業、農業などへだ。資本自由化のもとで、独占資本集団は外資も一枚加わったいっそう決定的な大型合併、系列大再編成、そして生産過程のいっそうきびしい節約合理化へ駆り立てられるだろう。六四〜六五年不況は、大型合併、系列再編、そして猛烈な合理化をとおして、高水準の中小倒産をともなったいびつの「大型景気」をとともかくも生み出し、「生活防衛か企業防衛か」の激突でいったん麻痺しかかった組合主義春闘での労資取引をとともかくも回復維持した。とすれば、ドル緊急措置の追い打ちをくらった七〇〜七一年不況は果してどうか？

まず、「受け皿不況」は階段式にもう一段深刻化せずにはいない。そして、こんごの赤字財政によって積極化されるであろう公共投資主導型のあらたな好況——それは日本帝国主義がばう大な金・外貨準備をためこんだ以上、そしてまたいわゆる「社会資本」の極度の立ちおくれが存在している以上、一応可能である——は、もはやこれまでの民間設備投資主導型のそれほど力強い牽引力、波及力をもたないだろう。とすれば、中小倒産はいっそう持続して目立つだろうし、組合主義春闘での労資駆引の麻痺解体は格段にすすむものとみななければならぬ。

そしてさらにこれに、財政インフレによる人民大衆の全般的収奪がつけくわわるのだ。

日本帝国主義は、その内部成長力の弱体化、ドル緊急措置による痛打によって、いまやようやく、しかしまぎれもなくかつて西ヨーロッパ諸国が六四〇六五年不況で直面したと同じ状況に直面しつつある。内部成長力の弱体化、ポンド防衛の相乗的な不況圧力によって、西ヨーロッパ諸国支配階級は、激化する国際競争に打ちぬくため、きびしい強権的な所得政策をもってする国内攻撃に精力を集中した。そして、そうすることが、フランスの「五月」を、またイタリアの「暑い秋」を準備したのだ。

われわれはいまや確信をもっていうことができる。日本帝国主義もまた、ニクソン訪中にともなう支配階級の権威失墜をも加速要因としつつ、みずから同じことを準備せずにはおかない、と。

(五) 日本帝国主義の階級闘争は、一九六七〜六九年議会主義的街頭反戦反政府闘争、戦闘的組合主義のスケヂュール賃金闘争の戦後型のパターンを突き破って、最初の革命的高揚の大波を生み出した。だが、それは、主として地理的に近接したヴェトナム革命戦争の衝撃が反戦基地闘争をおして学生をとらえたことによって準備されたもので、したがってそれは、一方で学園占拠・都

市反乱となつて爆発したものの、他方で色濃く小ブル急進主義的な色彩を残し、行動においては戦後型の議会主義的街頭反政府闘争を乗り超えながら、意識においてはその枠内にとどまった。そしてこの高揚の中で公認の革命指導部の地位についた新左翼諸派は、学園占拠・都市反乱をそのものとして深化拡大することができず、かえ

ってパリケイド占拠が生み出した革命的大衆を街頭反政府闘争に召喚しつづけ、待ちかまえた国家権力機動隊の網の中へ投じて敗北を喫したのであった。そしてこの間、ともかくも「大型景気」のもとにあった工場労働者大衆、なかでも戦格的な地位を占める民間大企業の労働者大衆はついに本格的にみずからの職場の占拠によってこの闘いに合流することはなかったのだ。第一の革命的高揚が支配階級のどう喝によって虚勢された工場労働者大衆の魂を揺り動かし、その一部を街頭へ呼び出したものの、ついにそれ以上ではなかった。

だが、いまや、いっそう露骨な合理化、所得政策のごりおし強行によって、組合主義賃闘がふたたびしかもいっそう決定的に麻痺し、そこから離反した工場労働者大衆がみずからの職場のみずからの反乱闘争を闘い、その闘いをみずからの工場占拠闘争へと爆発させるはじめての機会が到来しつつある。来たるべきいっそう決定的な

革命的高揚の大波は必ずや工場労働者大衆自身によってその職場から準備されるであろう。

そしてその鍵はわれわれ工場占拠派の先行的な闘いが握っている。

独立中小企業での先駆的かつ連続的な職場制圧から職場占拠への闘争、公労協などでの新左翼諸派・日共とのはげしい党派闘争をおしての反合反弾圧の職場闘争、われわれ工場占拠派がそれらの目的意識的かつ先行的な展開によって工場労働者大衆の不満と現状打破のエネルギーを解放しうるか否かに、近づきつつある革命的高揚の帰趨はかかっている。

前衛

1部50円

20回1000円

☆激化する世界危機をプロレタリア日本革命へ!!

☆日本革命をアジア革命の勝利と

世界革命の突破口とせよ!!

発行『前衛』編集委員会

武装

6号

定価200円

- 行動委員会運動総括・組織総括
- 階級情勢の特徴と権力闘争の任務
- 「反戦派」労働運動批判

青年共産同盟機関誌

世界革命 No.3 定価250円

発行 前衛社

東京都千代田区飯田橋3-1-6 飯田町ビル
振替「東京44589番 前衛社」
TEL (264) 8669